

## アンケート調査等による事故実態把握調査について

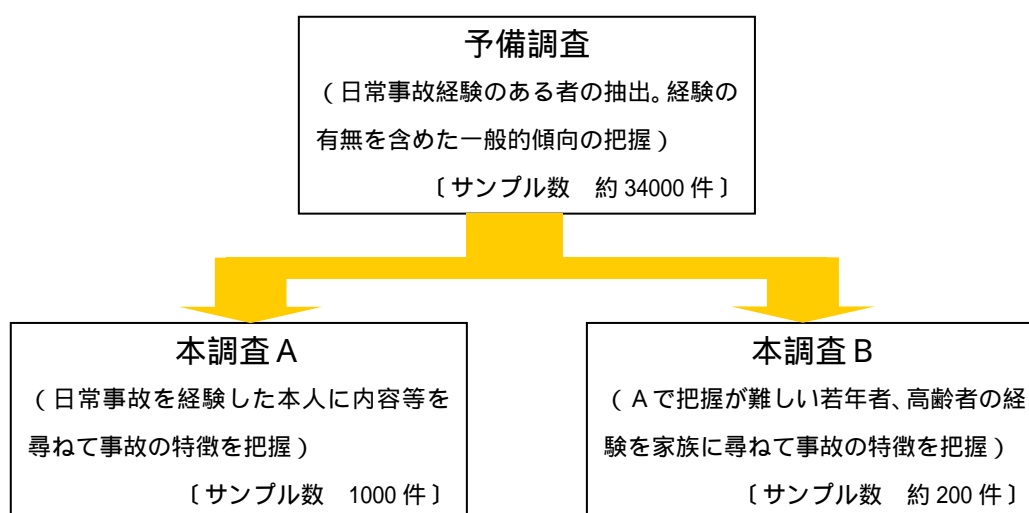
### 1. インターネットを利用したアンケート調査について

#### 1-1 調査概要

一般の市民が建物内で、一体どの程度日常事故<sup>1)</sup>に遭遇しているか、その実態を把握するためにインターネットによるアンケート調査<sup>2)</sup>を行った。調査の概要は以下の通りである。

調査日程：平成18年10月～11月

調査の流れ



調査事項（詳細については次ページ以降の調査結果概要参照）

建物内（自宅を除く）で起きた日常事故の実態。

日常事故が起きた要因・状況に対する経験者等の意識。

#### 留意事項

今回の調査では建物内でおきた日常事故の種類として以下のものを例示した。日常事故にはケガには至らなかったヒヤリ・ハットした経験も含むこととした。（表2 - - 1）  
事故の程度の区分については、表2 - - 2の通りである。

1) 日常事故とは、火事や地震による事故ではなく、日常生活において建物内で滑ったり転んだり挟まれたりしてケガなどをする事故を指している。

2) 専門調査会社に登録しているモニターを対象としている。

表 2 - - 1 日常事故の種類

墜落事故：バルコニー・窓・吹抜などから落下する事故
転落事故：階段から転げ落ちる事故
転倒事故：つまずいたり、すべったりして転ぶ事故
落下物による事故：タイルやバルコニーの置物が落ちてきてぶつかる事故
ぶつかり：建物のどこかに体をぶつける事故
はさまれ：ドア・引き戸などに指などをはさまれる事故
こすり：建物のざらざらした表面でこすって傷つけられる事故
鋭利物による事故：窓ガラスなどで体を傷つけられる事故
やけど：ボイラーやストーブなどでやけどする事故
感電：コンセントなどで感電する事故
ガス中毒事故：ガス器具などで中毒する事故
溺水事故：浴槽などで溺れる事故

表 2 - - 2 事故の程度の分類

ヒヤリ、ハットした	〔略称：ヒヤリ、ハット〕
痛かった出来事に遭った（特に処置しなかった）	〔 "：痛かった 〕
軽いケガをした（救急箱で手当した等）	〔 "：軽度のケガ 〕
中程度のケガをした（通院で治療した等）	〔 "：中度のケガ 〕
重いケガをした（救急車で運ばれた、入院した等）	〔 "：重度のケガ 〕

その結果について、設問毎に集計したものを次項に記載する。

## 1 - 2 調査結果

### 1 - 2 - 1 予備調査結果

調査日程 10月13日～31日

#### 調査の趣旨

- ・ 本調査で詳細な質問を送付する者を選択するための調査(日常事故経験がない者を除く等のフィルタリング)
- ・ 上記フィルタをかける前のサンプルの傾向把握

#### 調査概要

発信数 約11万件

ネット登録者の制約から15歳以上。

回収数 34095件

質問内容(詳細は別添資料)

Q1．事故の程度 × 事故の種類

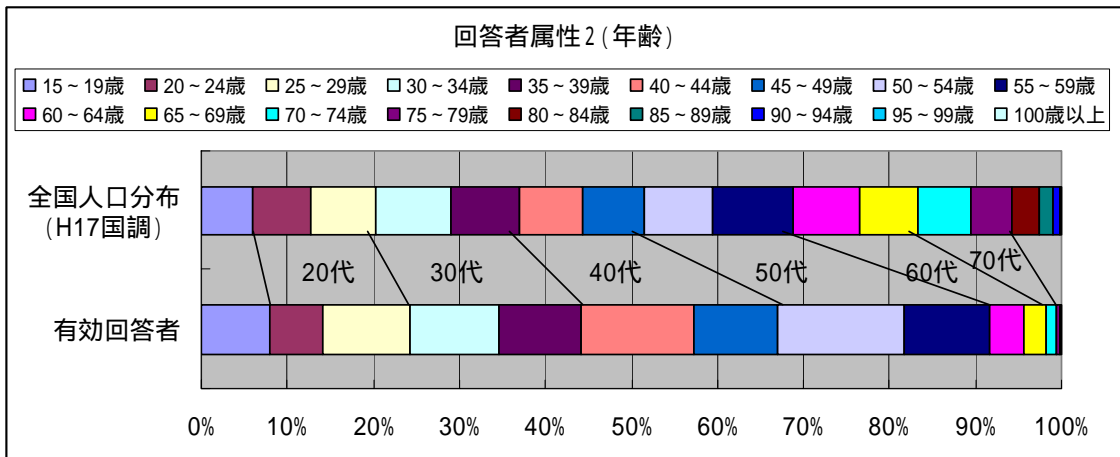
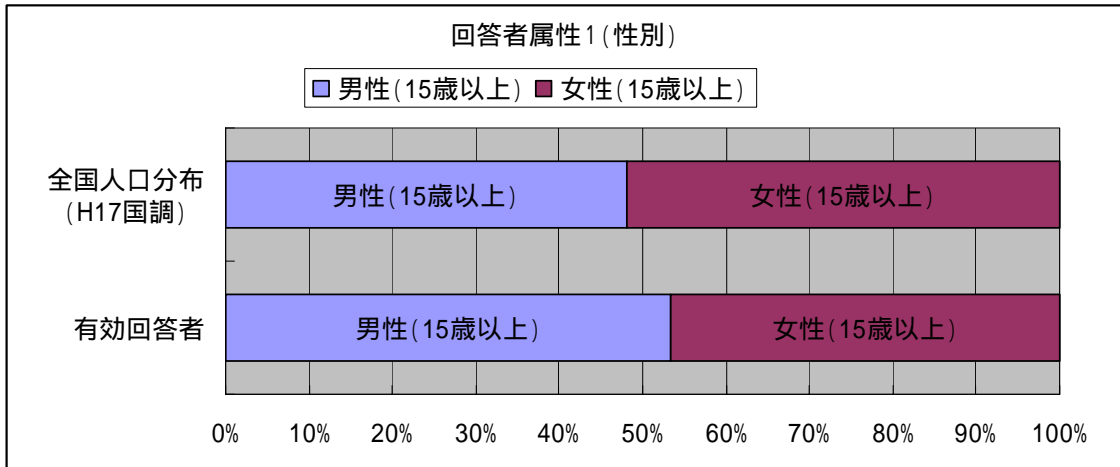
Q2．事故の程度 × 事故の時期

Q3．事故の程度 × 事故の場所

(Q1～Q3は1つの表を分割したもの)

Q4．同居家族の事故の把握

## 回答者属性



60代以上についてはインターネット・アンケート会社に登録している者が少ないので、登録者全員に送付しているが偏りが生じている。

[その他の属性データ](省略)

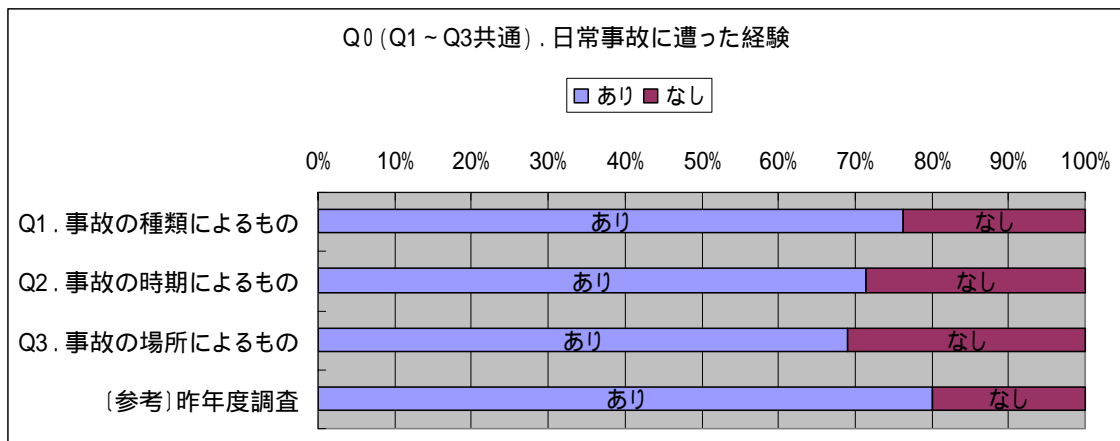
- ・居住地(都道府県)
- ・職業
- ・未婚・既婚
- ・子供の有無

## 予備調査結果概要

### 【全体的な留意事項】

予備調査は本来本調査で質問する対象者を選択するために行っている。このため、サンプル数が多い、質問数は少なく内容は簡単、母標本すなわち質問送付者・回答者とも特筆すべき傾向を有していない、という特徴がある。

Q1～Q3の質問では「ヒヤリ・ハット」「痛かった」「軽度のケガ」「中度のケガ」「重度のケガ」ごとに直近の事故について種類や時期、場所を尋ねている。本調査においてケガの程度に応じたフィルタリングをかける可能性を考慮したためである（単に直近の事例とするとヒヤリ・ハットばかりになるおそれがある）。したがって、合算したデータを見る場合には注意を要する。おおまかな傾向の把握にとどめ、本調査で同様の質問をしている場合にはそちらの結果を利用したほうが信頼できる。

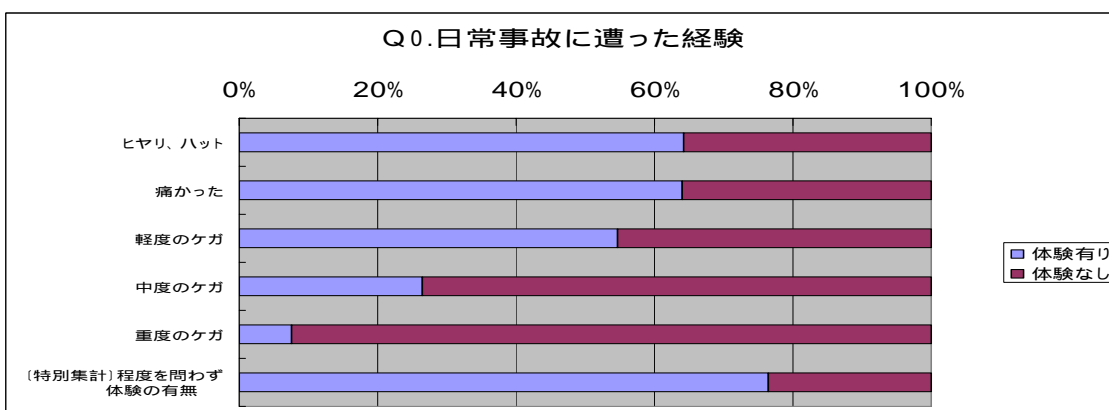


日常事故にあった経験の有無を集計したグラフ。Q1（種類）、Q2（時期）、Q3（場所）いずれの質問からも集計可能なため併記。本来は一定のはずだが、質問によってブレが生じている。昨年度調査も参考にして総じて言えば**おおむね7～8割が事故経験あり**と見られる。

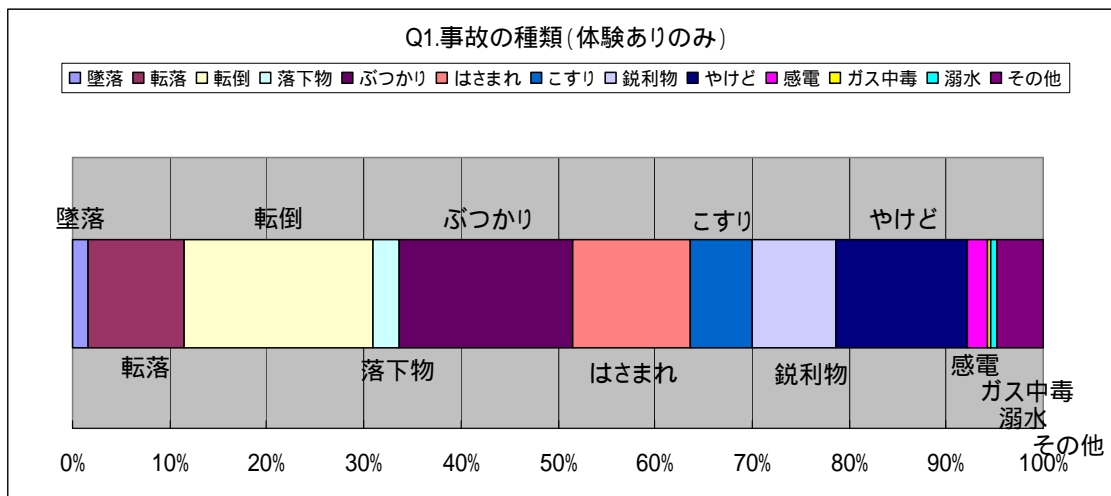
昨年度に比べて事故の種類例示に「やけど」や「感電」なども加えたため、高めにしても良さそうだが、いずれも低く出ている。原因としては、調査サンプルのブレ、事故の種類・範囲の表現方法の違い、による差ではないかと思われる。について説明すると、昨年度は「事故に遭った、または事故に至らなかったが危ないと感じた体験」として、「床で滑る」「段差につまづく」「ドアに挟まれる、ぶつかる」「階段・エスカレーターで転ぶ」「窓・ベランダから転落する」の例示を上げたが、今回は事故の種類を「墜落事故」「転落事故」...「溺水事故」「その他の事故」と定義・解説をおいた上で「本調査でいう日常事故には実際にケガをしたというものから危ないと感じた、ヒヤリ・ハットしたというものまで含みます」と注意を加えた。このため、「滑った」「つまづいた」といった事故が顕在化しなかった体験・記憶は範囲に含めなかった可能性がある。



日常事故経験の有無をQ1に基づいて年齢別に集計したグラフ。年齢による事故経験率にはあまり差がない。ただし、経験の有無のみを示しており、経験の頻度や程度はあらわしていない。

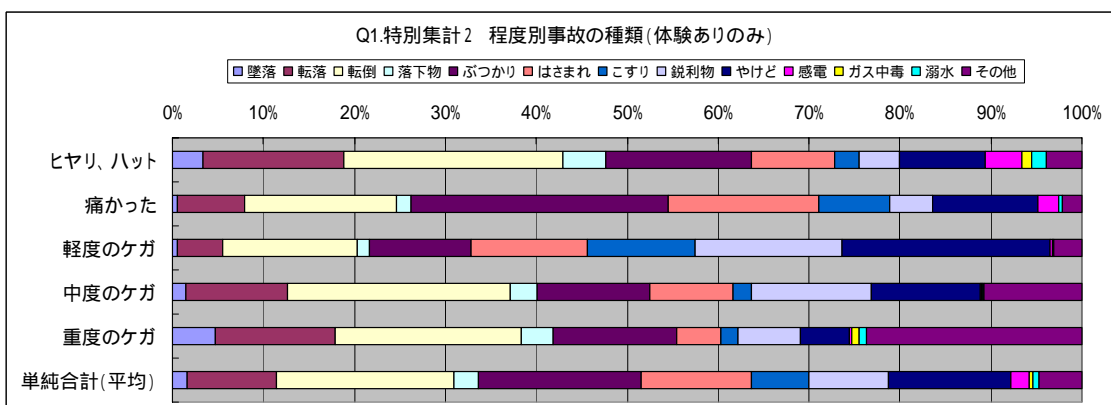
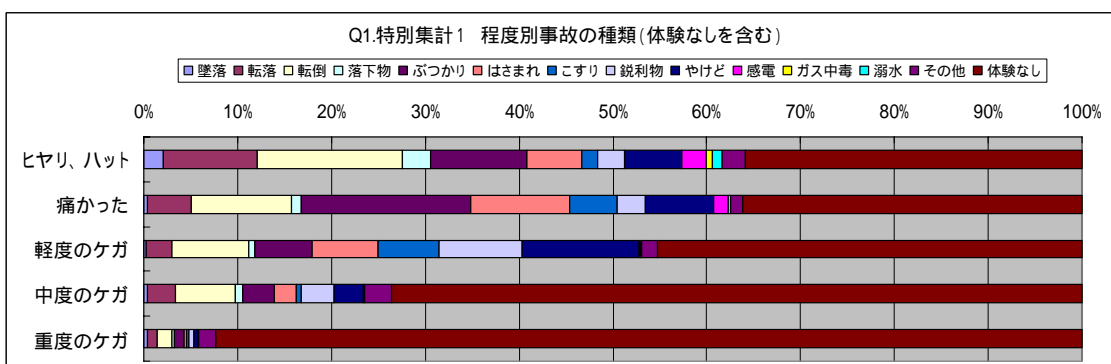


日常事故経験の有無をQ1に基づいて程度別に集計したグラフ(こちらの方が回答者の回答内容そのまま)。重大な事故になるほど経験者が減るのは常識的な傾向。「ヒヤリ・ハット」と「痛かった」の差があまりないのは前述のとおり表現方法による影響と思われる。



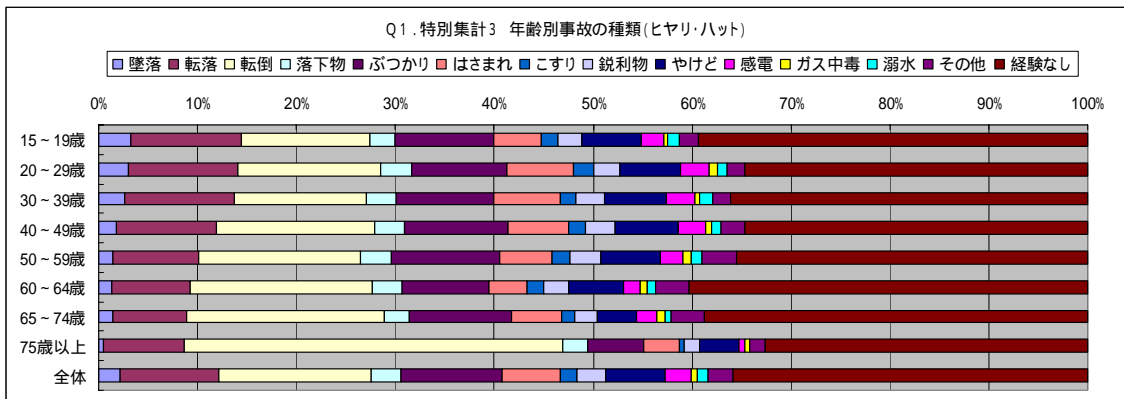
程度を問わず事故の経験ありと回答した者の経験した事故の種類を単純合計したグラフ。

「転倒」、「ぶつかり」、「やけど」が比較的多い。

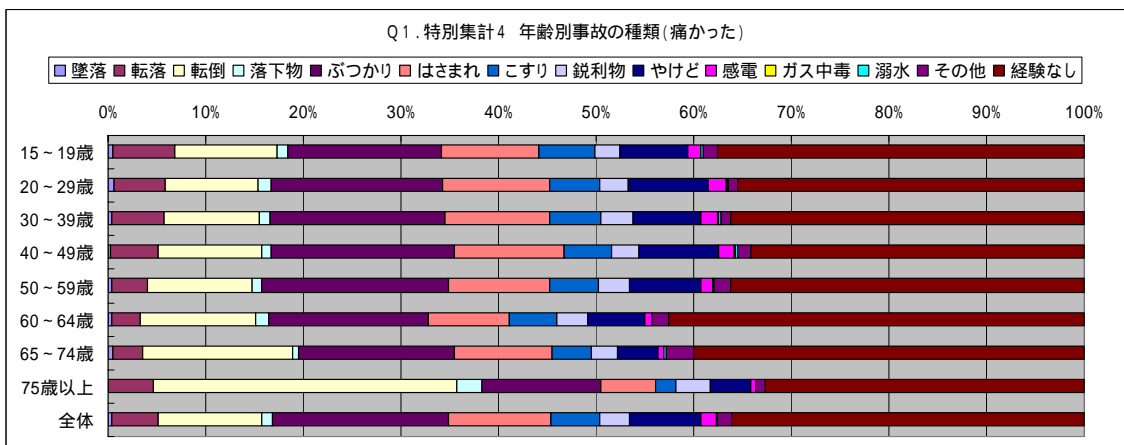


事故の程度別に事故の種類を集計したグラフ。(こちらの方が回答者の回答内容そのまま)

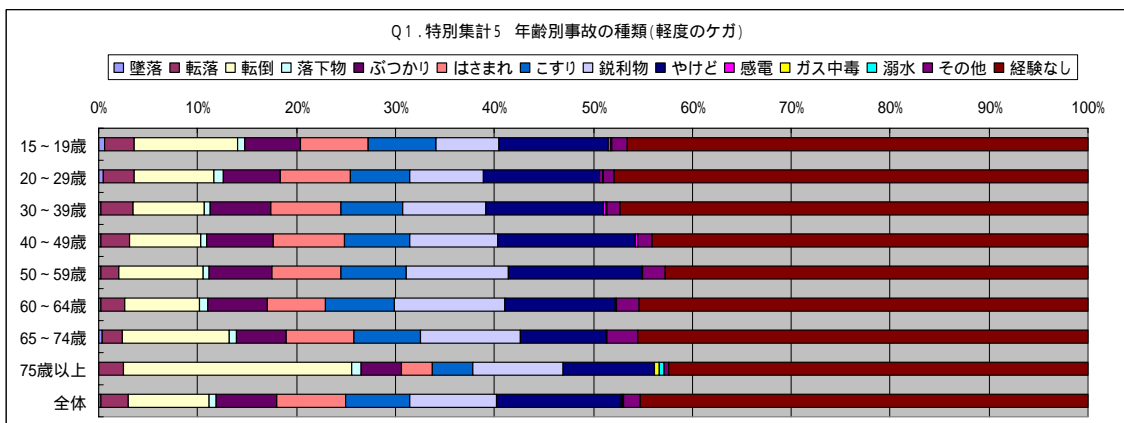
「ヒヤリ・ハット」では「転倒」が多く、「痛かった」では「ぶつかり」が多く、「軽度のケガ」では「やけど」が比較的多い。そもそも一般的に用いられる事故の種類が事故の程度と無関係ではないと思われる。



「ヒヤリ・ハット」について年齢別に集計したグラフ。最多の「転倒」は高齢になるほど比率が高くなる。逆に「転落」は若年での比率がやや高い傾向。

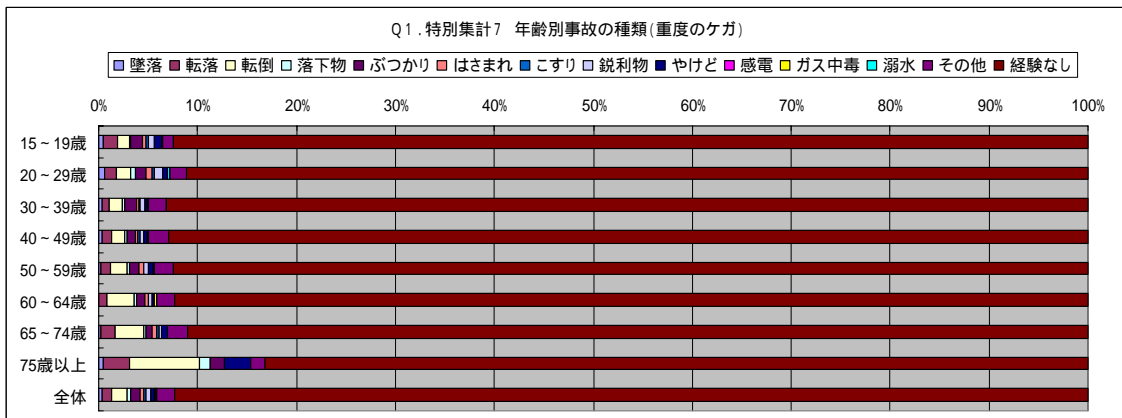
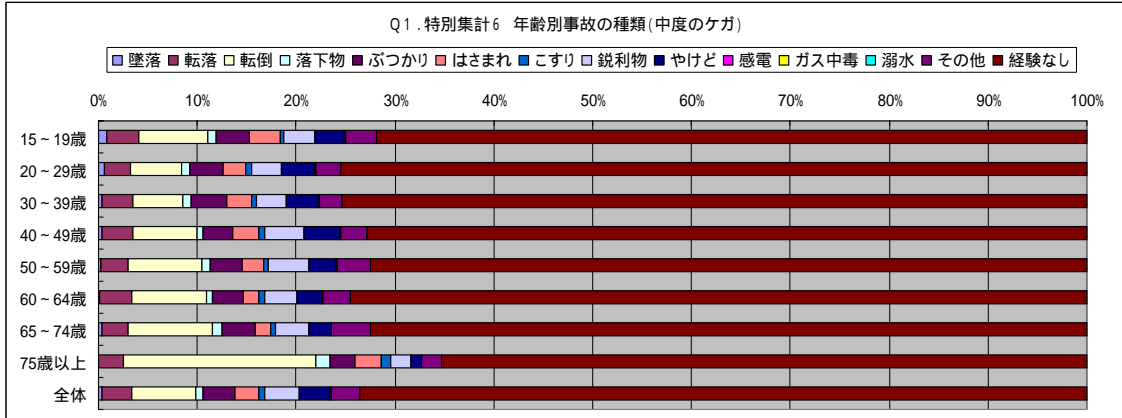


「痛かった」について年齢別に集計したグラフ。最多の「ぶつかり」は20代から50代で高い比率を占める。「転倒」は高齢になると増加し、75歳以上では突出して多い。「転落」は若年でやや高くなる傾向。

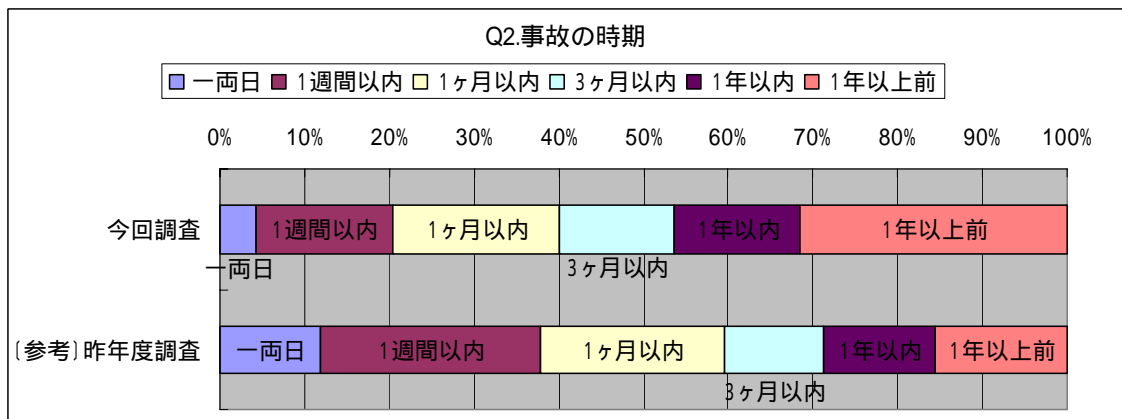




「軽度のケガ」について年齢別に集計したグラフ。最多の「やけど」は年齢にかかわらず比較的多い。「転倒」は若年と高齢で比率が高くなる傾向で75歳以上では顕著。

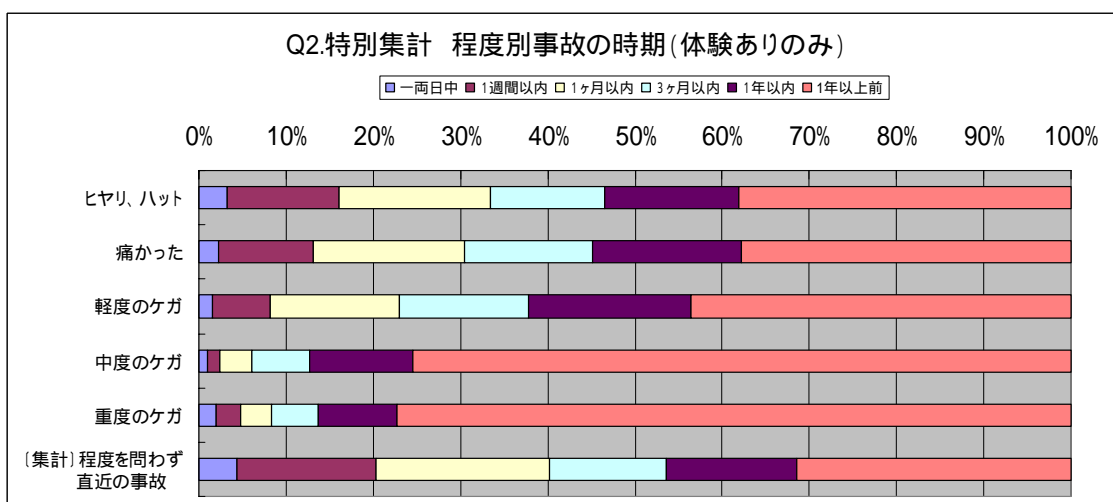
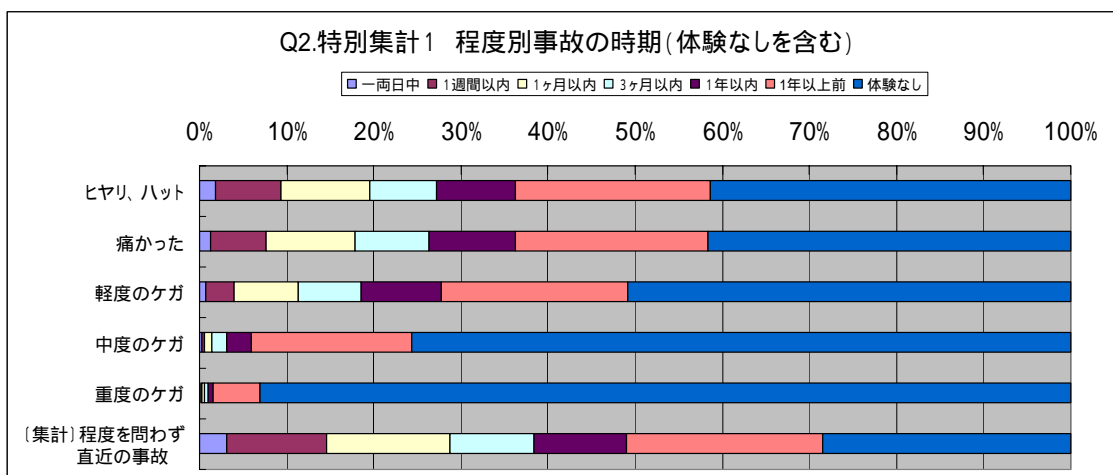


「中度のケガ」と「重度のケガ」について年齢別に集計したグラフ。高齢者、特に75歳以上で事故経験が多くなり、種類としては「転倒」が多い。「転落」は若年と高齢で高くなる傾向。

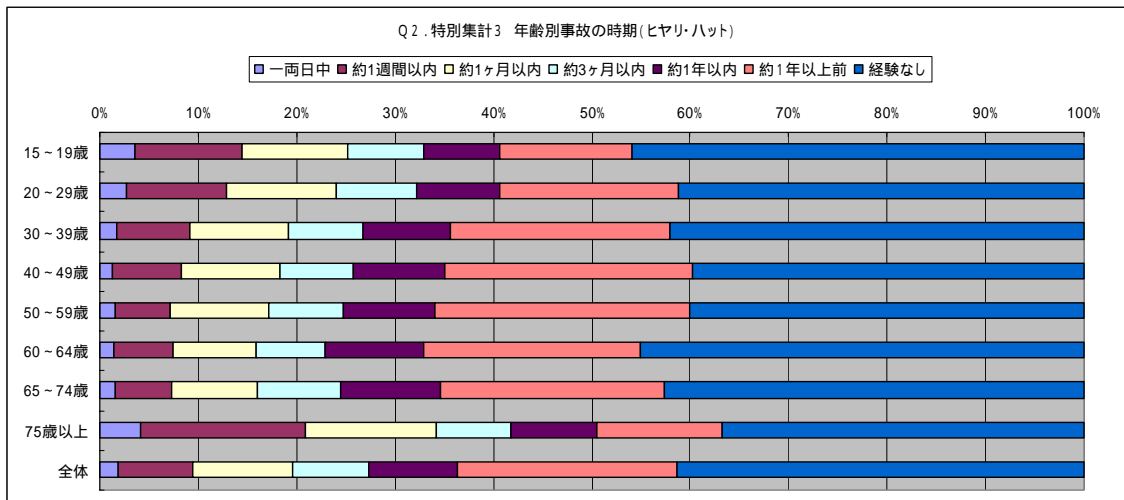


いずれかの程度において事故の経験ありと回答した者（回答者全体の約7～8割）を対

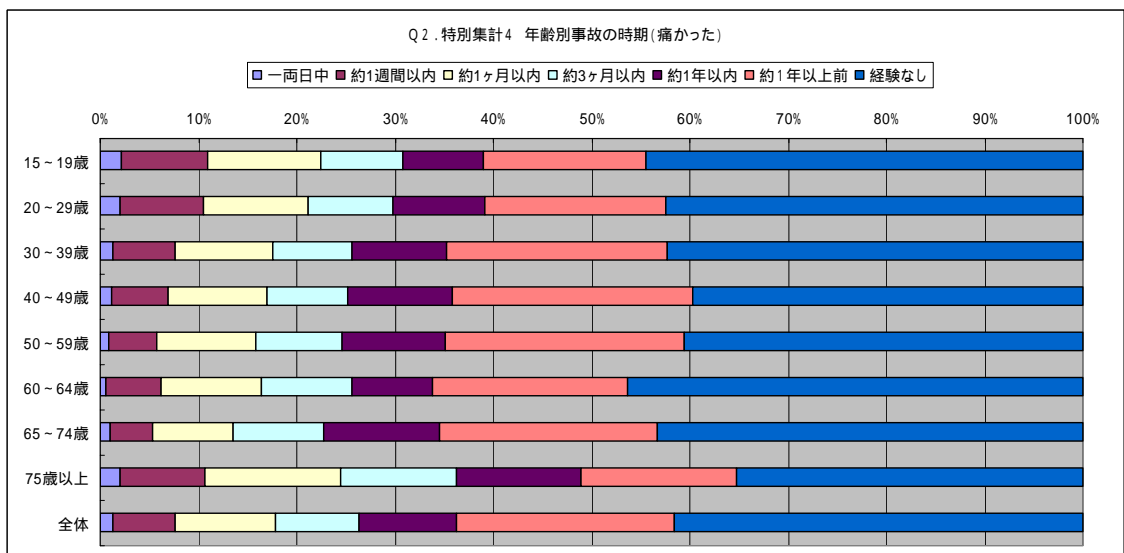
象に、程度にかかわらずもっとも最近事故にあった時期を集計したグラフ。約2割の者が1週間以内に、約4割の者が1ヶ月以内に日常事故を経験したと回答。



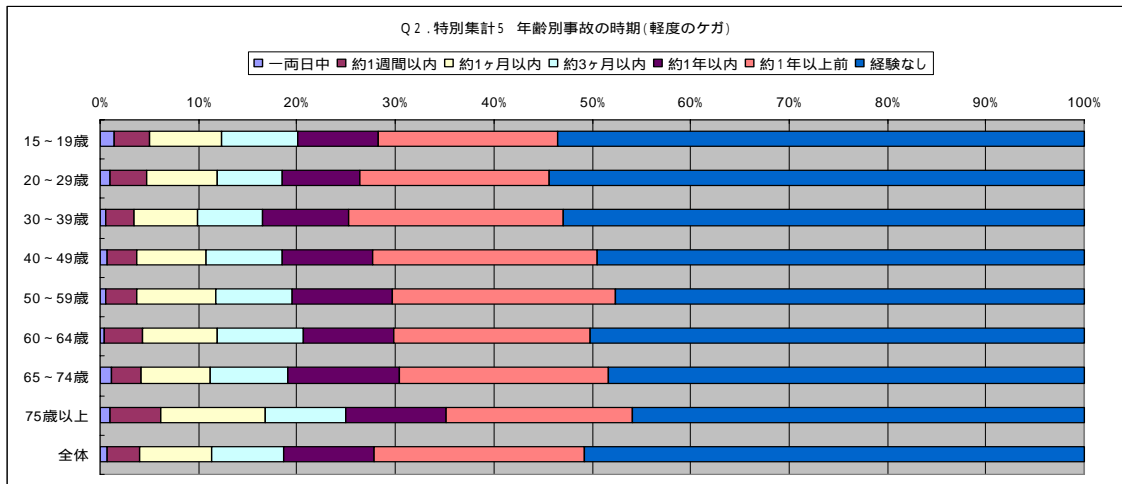
事故の程度別に事故の時期を集計したグラフ。(こちらの方が回答者の回答内容そのまま) 1ヶ月以内に経験した事故のほとんどは「軽度のケガ」以下。一方、病院での治療または入院に相当する「中度のケガ」と「重度のケガ」を1ヶ月以内に経験した者も約70件と回答者全体の約2%存在。



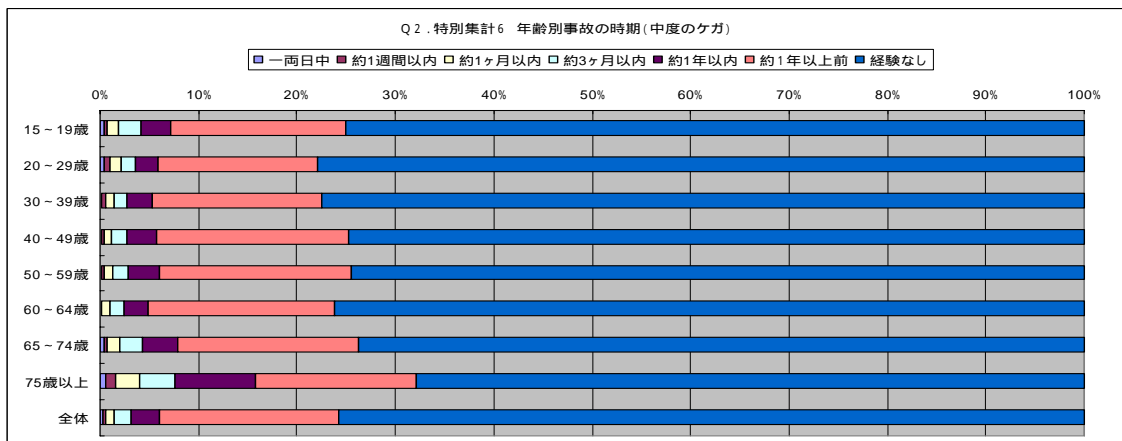
「ヒヤリ・ハット」について年齢別に集計したグラフ。若年者と高齢者において「一両日中」「約1週間以内」「約1ヶ月以内」「約3ヶ月以内」の比率が高いのが明らか。**若年者も「ヒヤリ・ハット」する機会が多い**という結果。



「痛かった」について年齢別に集計したグラフ。「ヒヤリ・ハット」と同じ傾向。**若年者も「痛かった」する機会が多い**という結果。

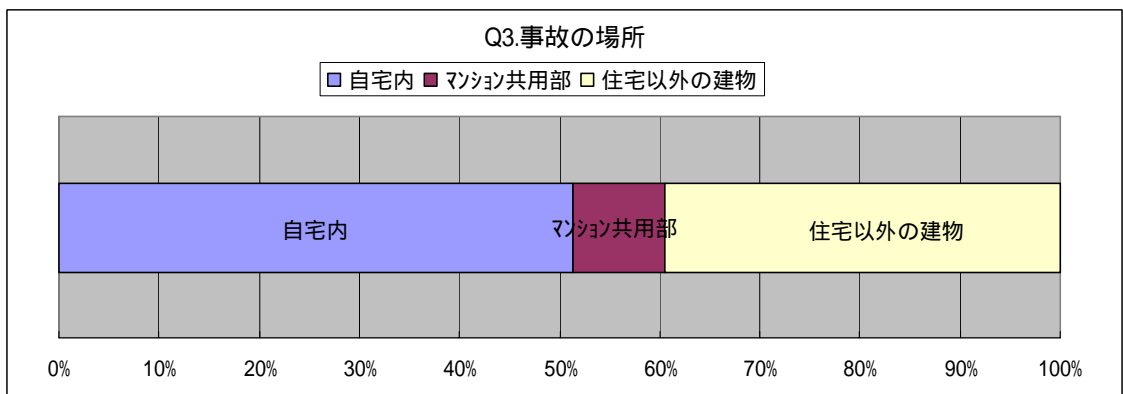


「軽度のケガ」について年齢別に集計したグラフ。やはり若年者と高齢者において「一両日中」「約1週間以内」「約1ヶ月以内」の比率が高いが、全体に占める割合（経験したことがある率）は低い。

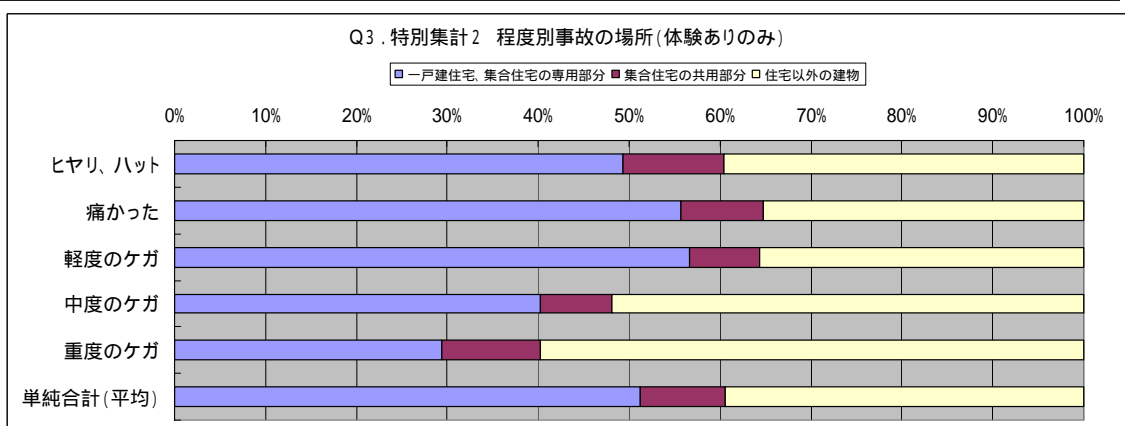
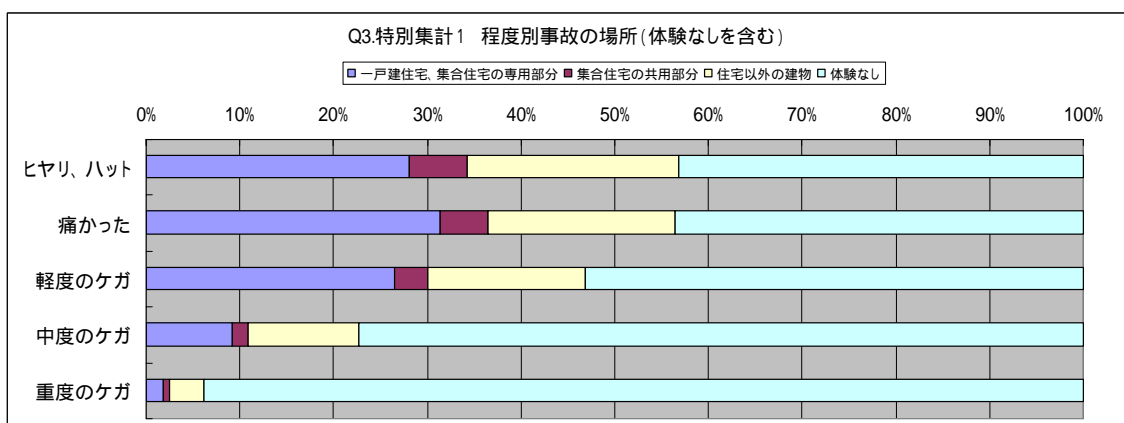


「中度のケガ」「重度のケガ」について年齢別に集計したグラフ。全体に占める割合（経験したことがある率）は低い、やはり時期にかかわらず若年者と高齢者が事故に遭った

経験が多いという結果。

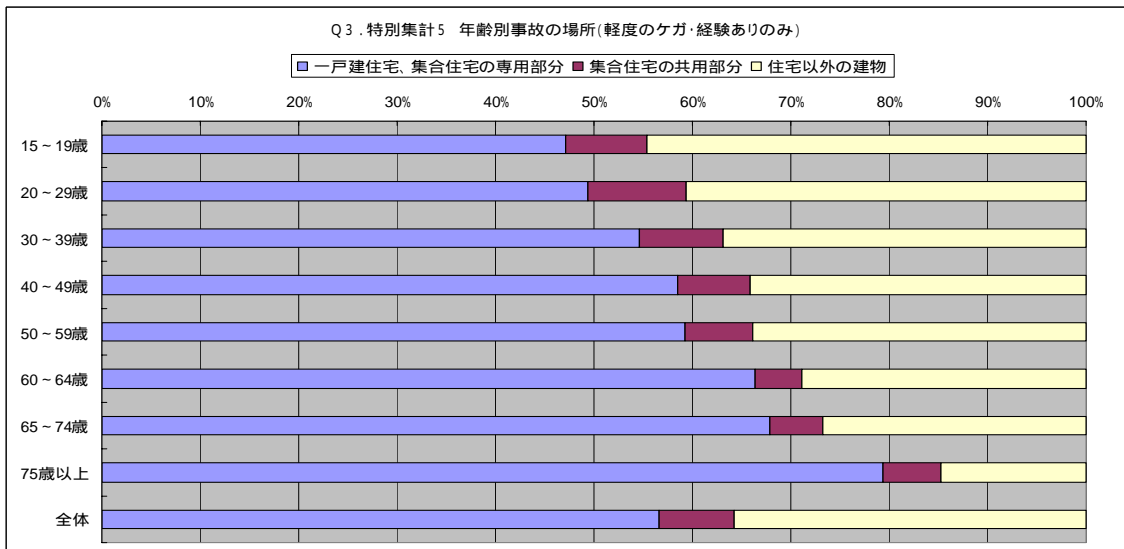
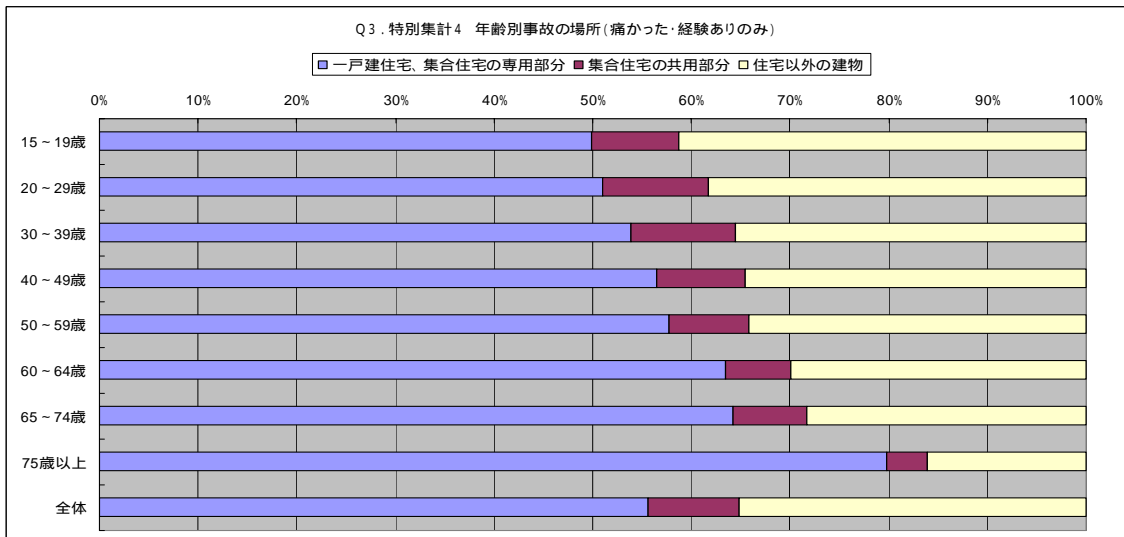
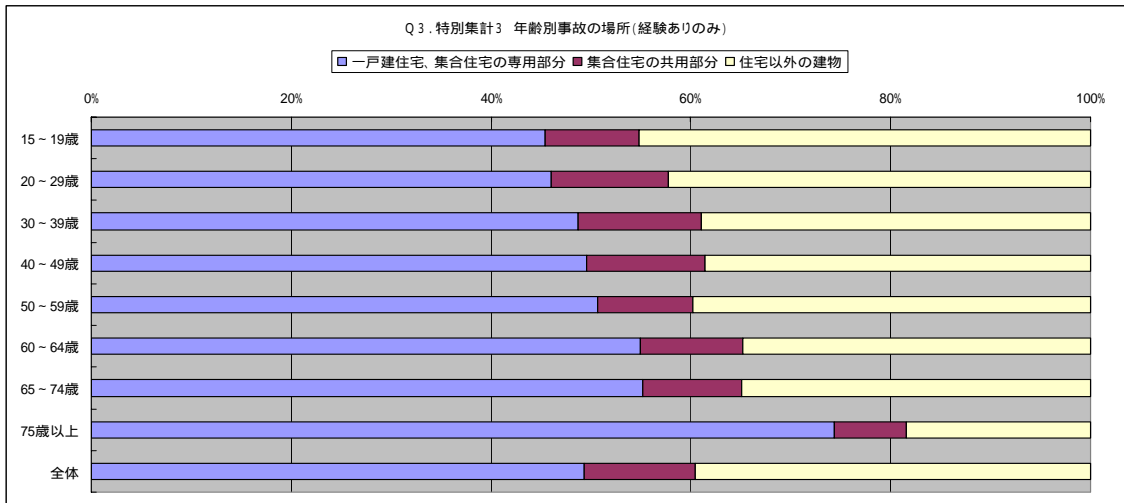


いずれかの程度において事故の経験ありと回答した者（回答者全体の約7～8割）を対象に、程度にかかわらずもっとも最近事故にあった場所を集計したものの。事故の程度別の発生頻度の問題があるが、おおまかな傾向としては日常事故の半分あまりが自宅内部。

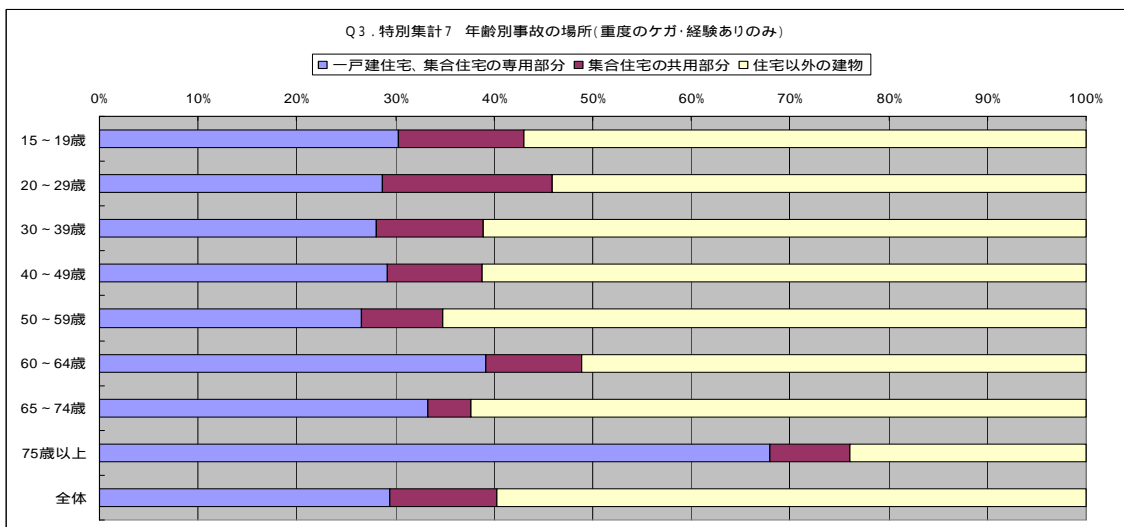
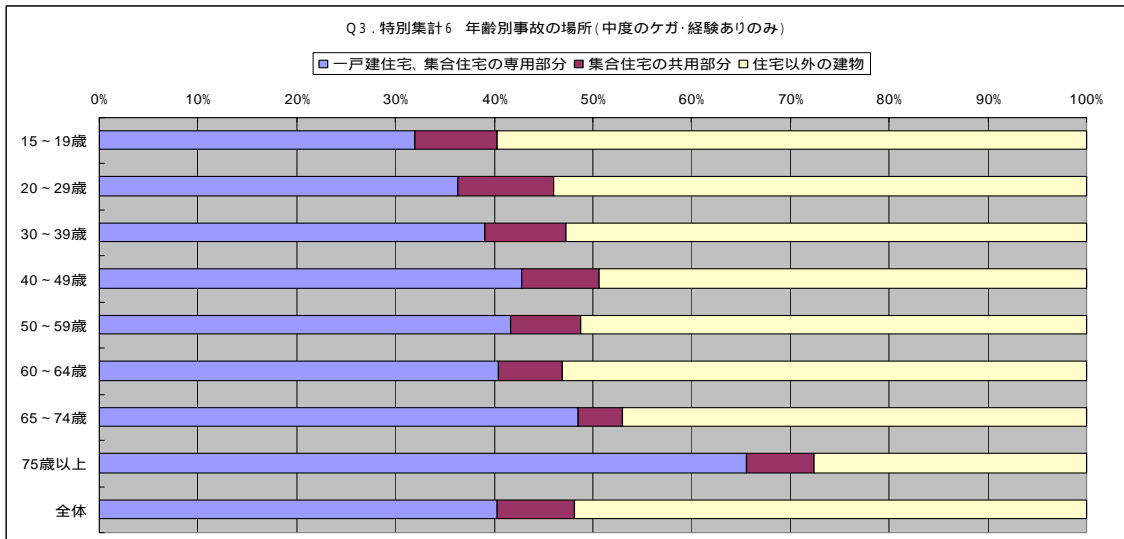


事故の程度別に事故の場所をグラフ化したもの。(こちらの方が回答者の回答内容そのまま)

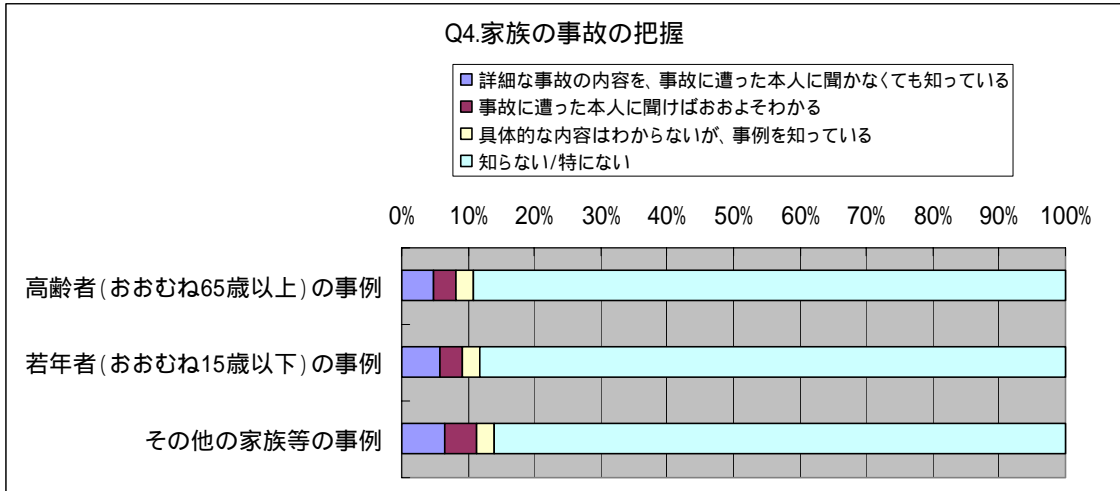
「ヒヤリ・ハット」「痛かった」「軽度のケガ」は自宅内部が比較的多いが、重いケガになるほど外部での比率が高くなる。



「ヒヤリ・ハット」「痛かった」「軽いケガ」について年齢別に集計したグラフ。高年齢になるほど自宅内部での事故が増える傾向。



「中度のケガ」「重度のケガ」について年齢別に集計したグラフ。高齢者ほど自宅内部が多いが全体的には外部で事故に遭うケースが過半に増加。



同居家族の事故事例を把握している者は少数。ただし、回答者には未婚が1 / 3、子供なしが1 / 2おり、単身者も相当数含まれると見込まれるため一般的に家族の事故を知らないとは言えない。



## 1 - 2 - 2 「建物内の日常事故遭遇」本調査 A（事故経験者に対する質問調査）結果

調査日程 11月10日～17日

調査の流れ

発信数 約 2100 件（回収数が下記 1000 件となるように補充しつつ発信）

対象者は予備調査で自宅以外で最近（3 ヶ月以内）に事故の経験があると回答した者。他のフィルタ条件はなし（やけど、感電等は除くとかヒヤリ・ハットばかりになりそうなので中度・重度のケガ事例を増やすとか、について検討したが、最終的には行わなかった）

回収数 1000 件

（基本的に性別・年齢が全体（16 歳以上の日本人人口）と相似になるよう予備調査結果から選択。ただし、高齢者（特に 70 代以上）はサンプル数が少ないため、適宜 60 代、50 代、40 代から補充。詳細は回答者属性参照）

質問内容（詳細別紙）

最も最近の事故 1 つについて質問（Q26 以外）

Q1．事故の種類

Q2．事故の程度

Q3．事故の時期

Q4．事故の時間帯

Q5．事故場所の日常性

Q6．事故発生時の日常性

Q7．Q6 の非日常性の内容

Q8．事故の起きた建物の種類

Q9．事故の起きた建物内の場所

Q10．～Q17.事故の起きた状況（建物内の場所別）

Q18．事故の起きたときの持ち物等

Q19．事故の起きたときの体の調子

Q20．他の人の影響

Q21．事故の状況や原因（記述による補足）

Q22．事故の責任

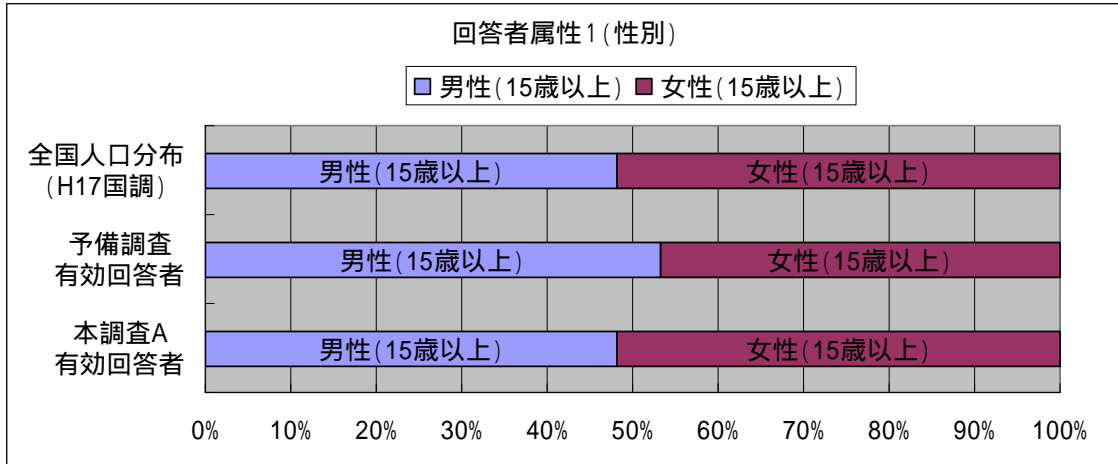
Q23．建物関係者の事故把握

Q24．事故後の改善

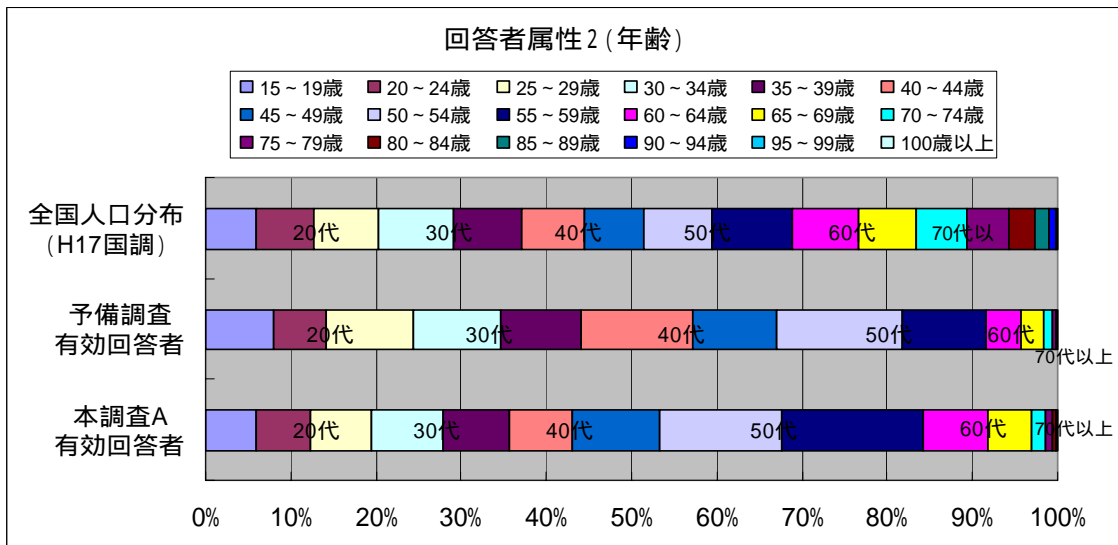
Q25．改善の内容

Q26．建物内の危ないと感じる場所

## 回答者属性



男女比は全国人口分布と同じになるように回答を求めた。



なるべく全国人口分布と相似となるよう回答を求めたが、インターネット調査という特性上、60歳以上、特に70歳以上の登録者は少ない。登録している高齢者で最近の事故経験のある者を年代の上から補充した結果、50代が多い分布となっている。

〔その他の属性データ〕(省略)

- ・居住地域(都道府県)
- ・職業
- ・未婚・既婚
- ・子供の有無

## 本調査 A 結果概要

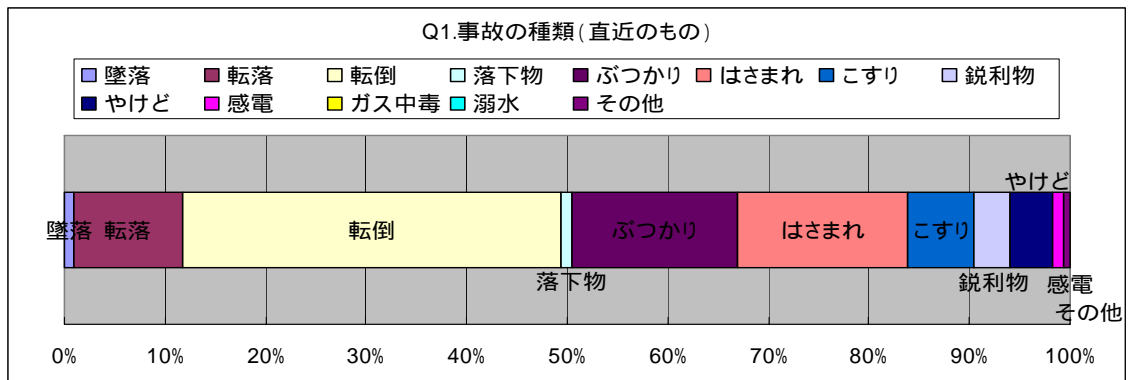
### 【全体的な留意事項】

#### 予備調査と本調査の尋ね方の相違点

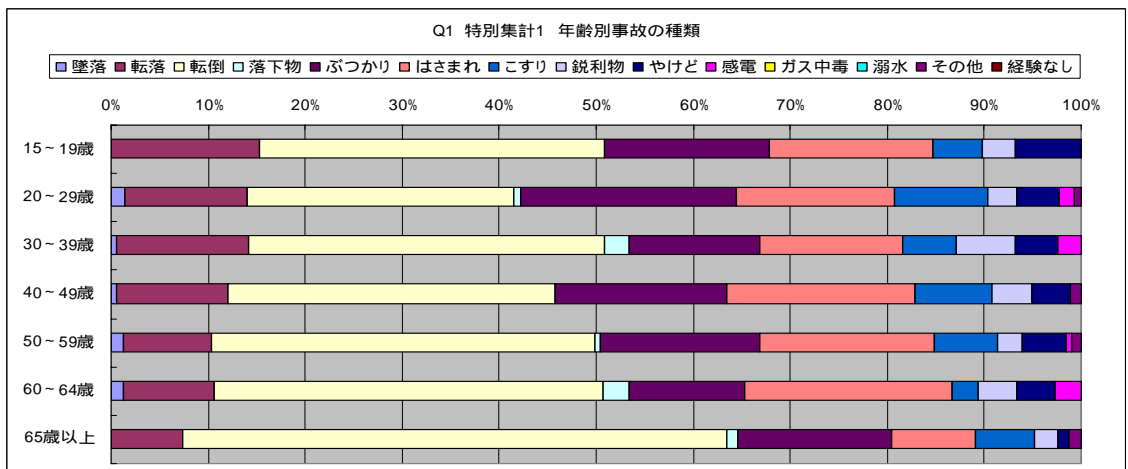
・予備調査では事故の程度（ヒヤリ・ハット、痛かった、軽度のケガ、中度のケガ、重度のケガの5区分）ごとに種類・時期を尋ねている。すなわち一人が5件について回答しているが、本調査では直近の事故1つを尋ねた。

#### 昨年度行った本調査との相違点

・昨年度はもっとも重い事故1つについて尋ねたが、今回は直近の事故について尋ねた。  
 ・昨年度は事故の種類を「転落」「転倒」「はさまれ」「ぶつかり」までの例示としていたが、今回は人口動態の分類等を参考に「やけど」「感電」なども含めて幅広に尋ねた。また、昨年度は「転落した」「転落しそうになった」...の選択肢を示したが今回は「転落事故」...として両者を含めた。

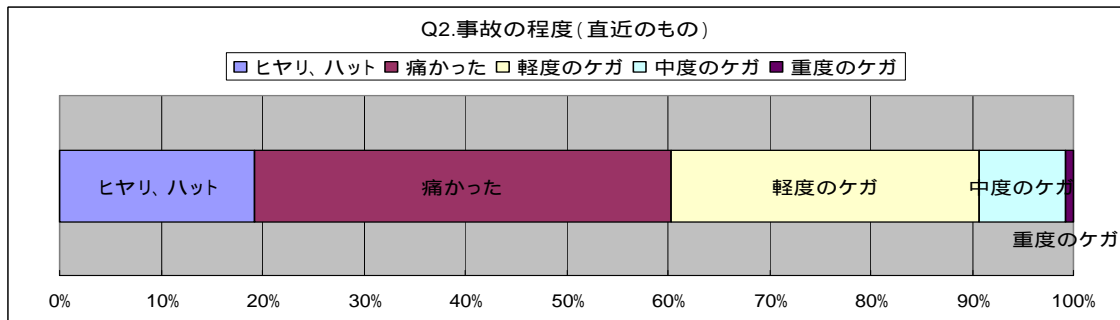


直近の事故について種類を集計したグラフ。「転倒」が38%、「はさまれ」「ぶつかり」が各々17%を占める。比較的軽微な事故が多いと思われる。



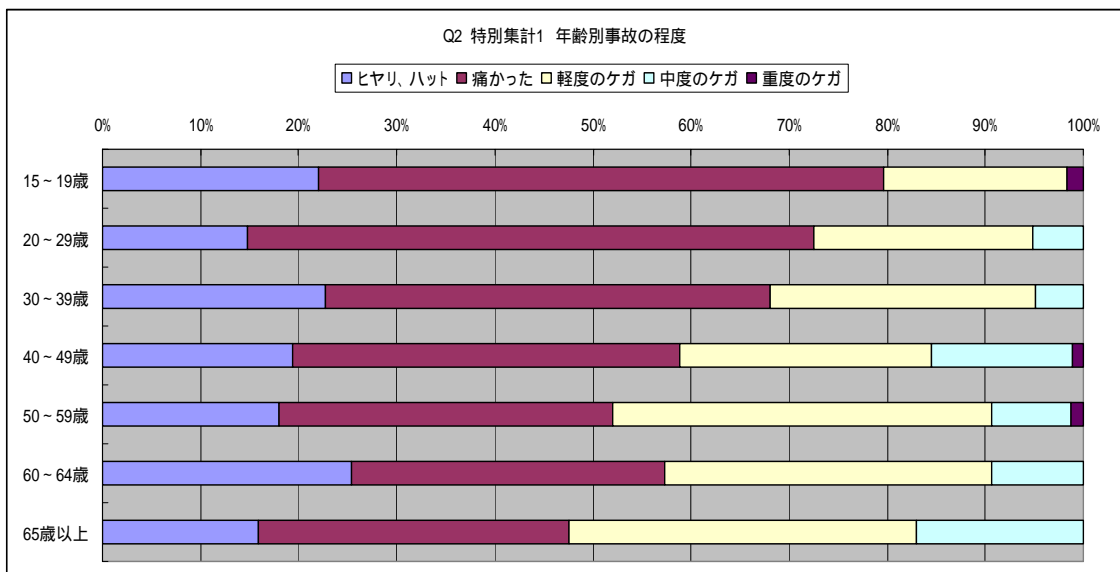
事故の種類を年齢別に集計したグラフ。65歳以上の高齢者では「転倒」が非常に多く、

「はさまれ」が少ない。年齢が低くなるほど「転落」「ぶつかり」が増える傾向がある。

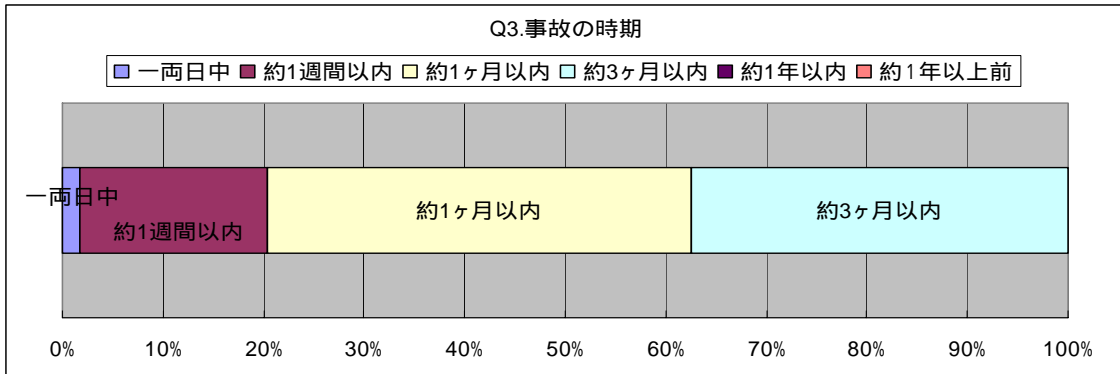


直近の事故について程度を集計したグラフ。「軽度のケガ」以下が9割、「中度のケガ」以上が約1割という結果。病院や消防などで把握される日常事故の陰には一桁多い事故・未然事故があると思われる。

「ヒヤリ・ハット」が「痛かった」より少ないのは、事故の種類をハッキリ定義して示したために実際に起きた事例に回答者の意識が傾いたためと思われる。

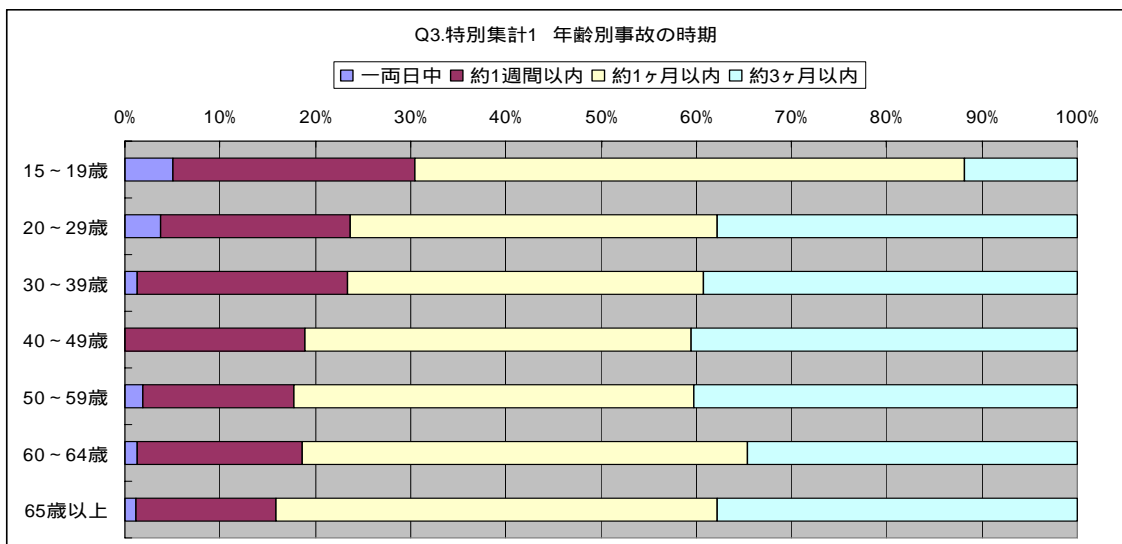


事故の種類を年齢別に集計したグラフ。年齢別にみると高齢者ほど「軽度のケガ」「中度のケガ」「重度のケガ」に至りやすいことが顕著にあらわれている。

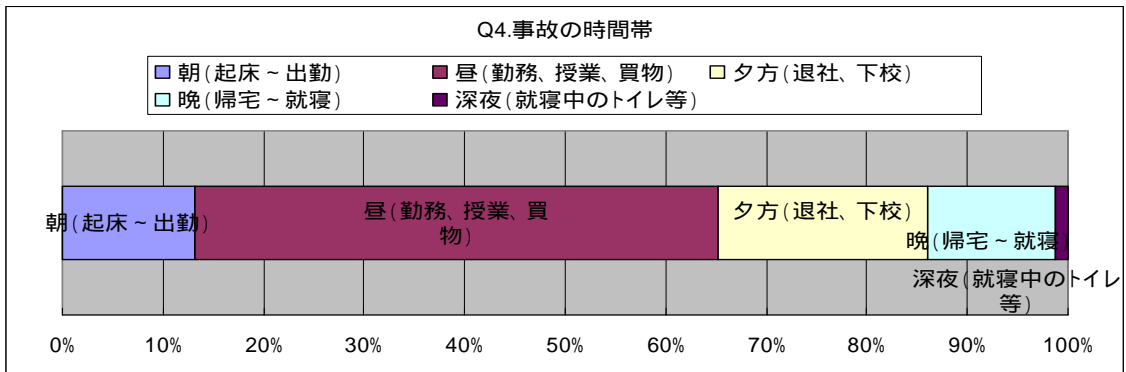


直近の事故について遭遇した時期集計したグラフ。本調査では3ヶ月以内に事故の経験がある者のみ質問したため、「約1年以内」と「約1年以上前」は現れていない。一方具体的内容まで尋ねているので曖昧な回答は捨象されていると考えられる。

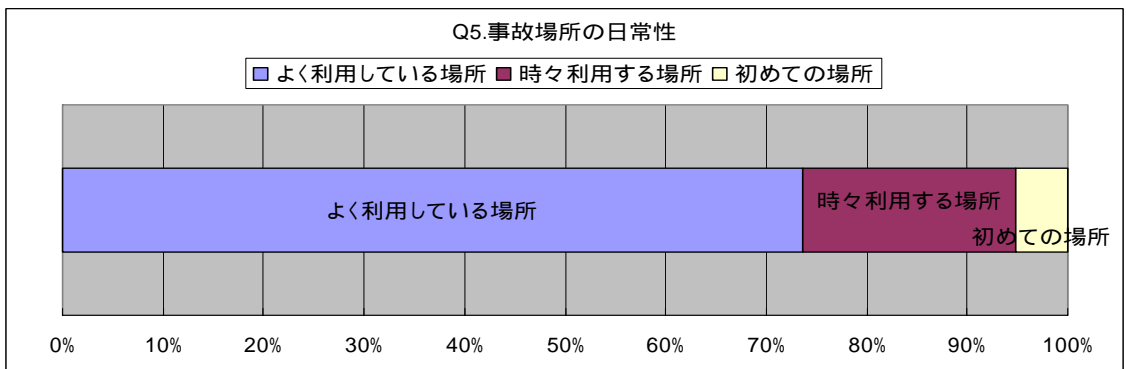
「一両日中」が約2%、「約1週間以内」が約19%、「約1ヶ月以内」が約42%と期間の長さの割合に近い。「約3ヶ月以内」が約38%であるのは、記憶が薄れているか、より最近に日常事故にあったのかであると思われる。全般的には事故にあっていない者の存在などを考えても2人に1人は1ヶ月に1度くらい日常事故に遭っている若しくは遭いそうになっていると考えられる。



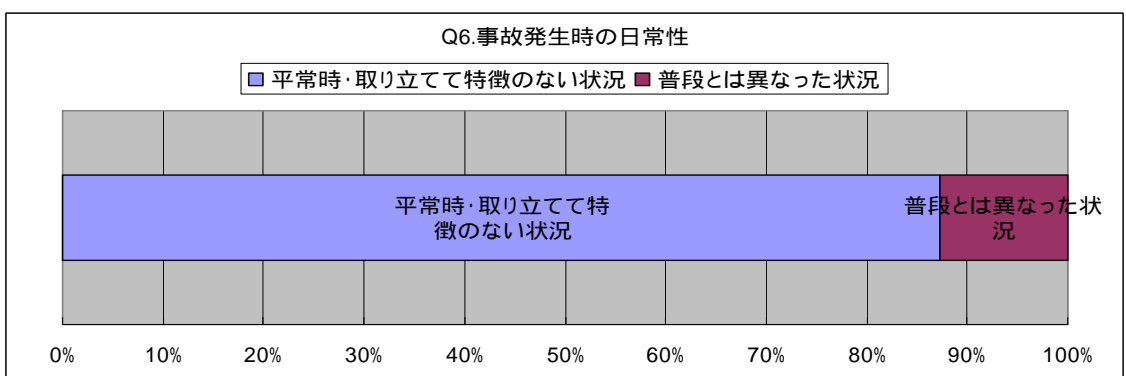
事故の時期を年齢別に集計したグラフ。若年者(15～19歳)の方が頻りに日常事故に遭っていると見られる。Q2で、ケガに遭いやすいのは高齢者という傾向とは逆の結果。



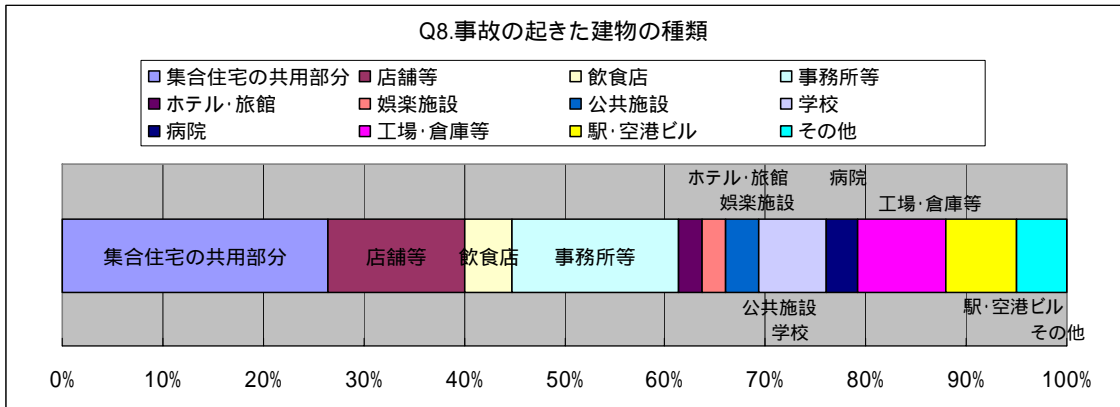
事故の時間帯を集計したグラフ。特段の傾向は見られない。自宅内を除いているので深夜が少ないのは当然。



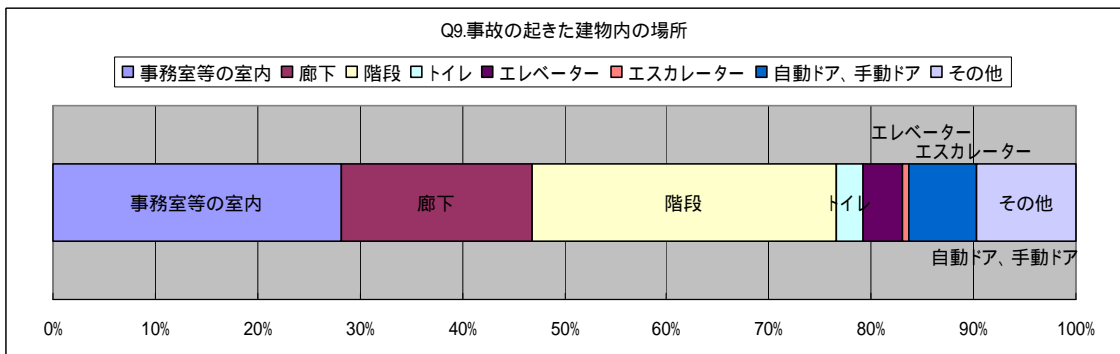
事故に遭遇した場所の日常性集計したグラフ。各々の場所にどの程度の時間滞在しているか不明であるが、慣れている場所でも事故は結構起こると考えられる。



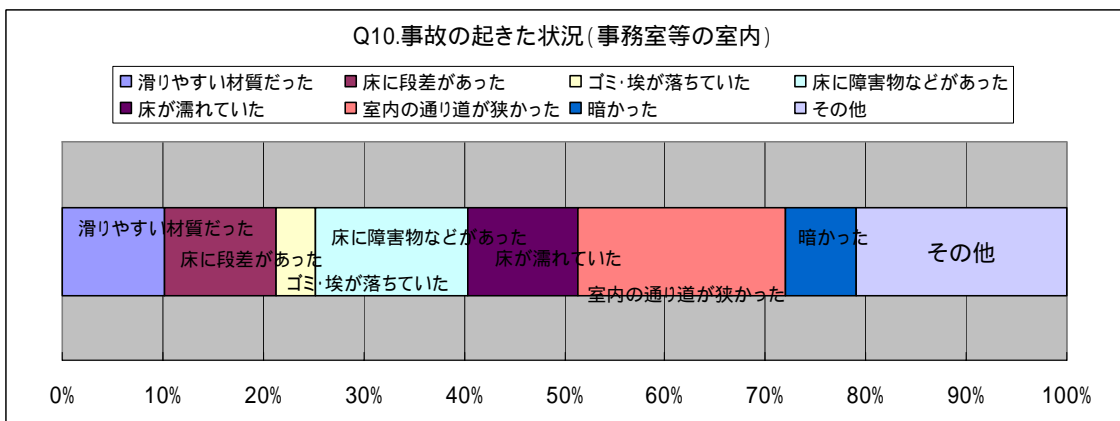
事故に遭った状況の日常性を集計したグラフ。「平常時」が約9割。普段とは異なった状況の内容をQ7で具体的に尋ねたが、「急いでいた」、「床が濡れていた」、などが多く「混雑していた」、はごく一部。



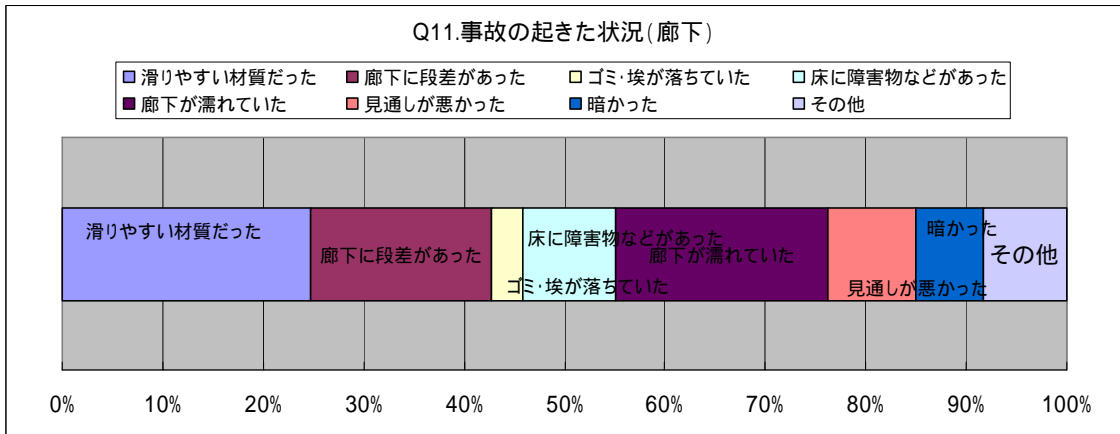
事故に遭った建物の種類集計したグラフ。自宅以外のうち集合住宅の共用部分が約2割というのは予備調査と比べてほぼ同様。**非住宅の建物では事務所と店舗が多い。**



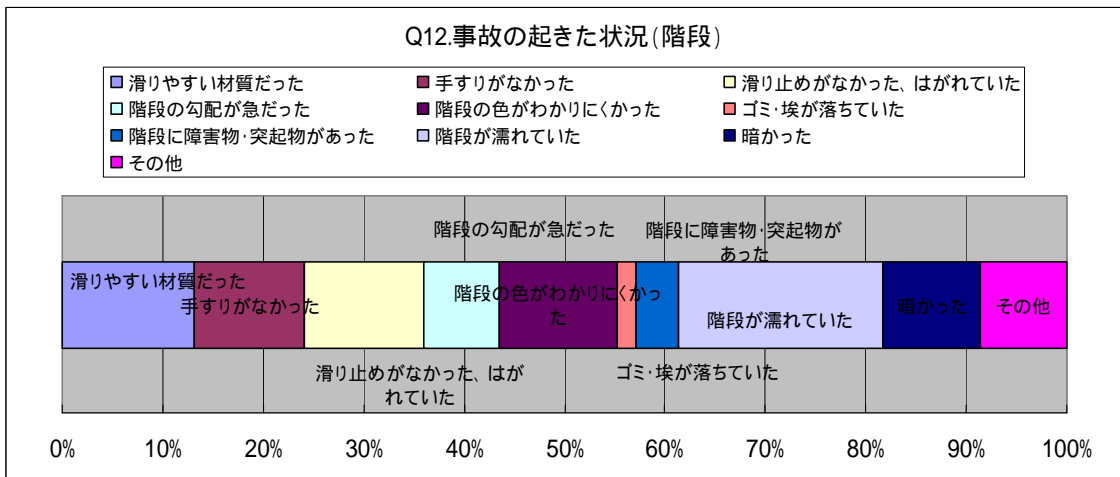
事故に遭った建物内の場所を集計したグラフ。事故の起きた建物内の場所は**室内、階段、廊下が7割以上**。エレベータ、エスカレータは少ない。



事故に遭った状況を「**事務室等の室内**」で起きた事故について集計したグラフ。「通路幅」、「障害物」、「床濡れ」など**管理面の要因が大きい。**

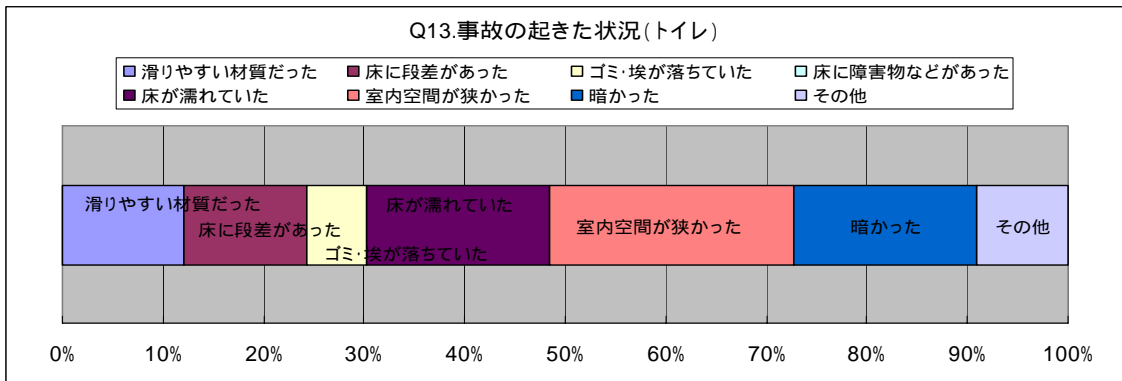


事故に遭った状況を「廊下」で起きた事故について集計したグラフ。「濡れていた」、「滑りやすかった」が多い。廊下での事故は材質、段差など設計面の要因も大きい。

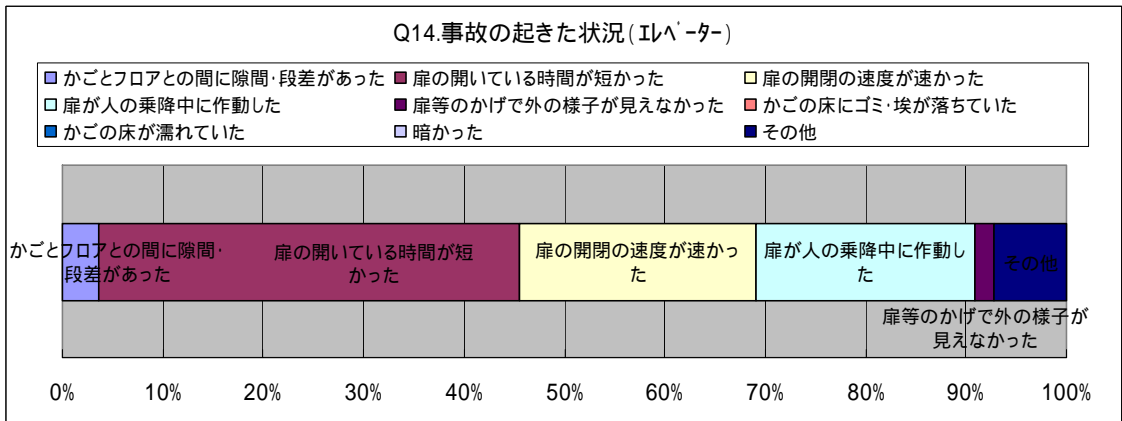


事故に遭った状況を「階段」で起きた事故について集計したグラフ。「濡れていた」をはじめ滑りに関しての回答が多い。「手すり」、「滑り止め」、「勾配」など階段独特の要因も大きい。

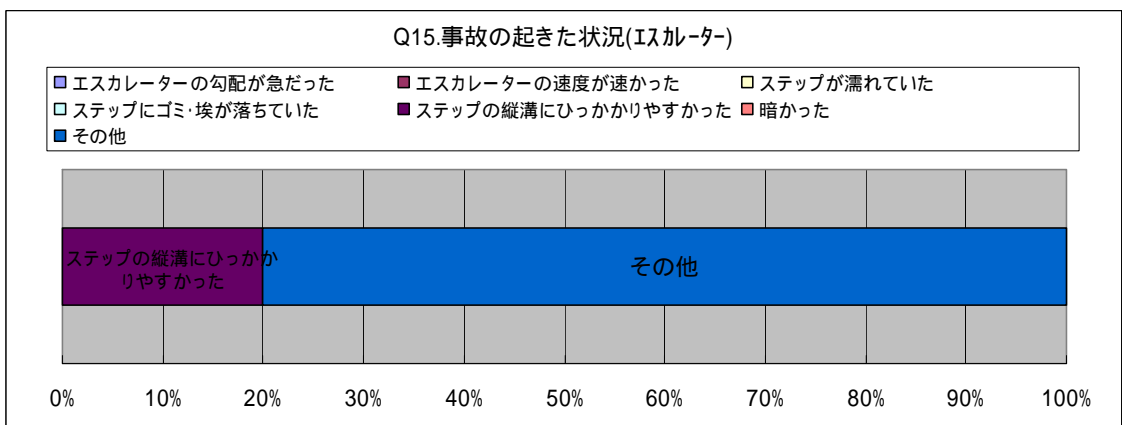




事故に遭った状況を「トイレ」で起きた事故について集計したグラフ。「狭い」、「暗い」、「濡れている」が多い。

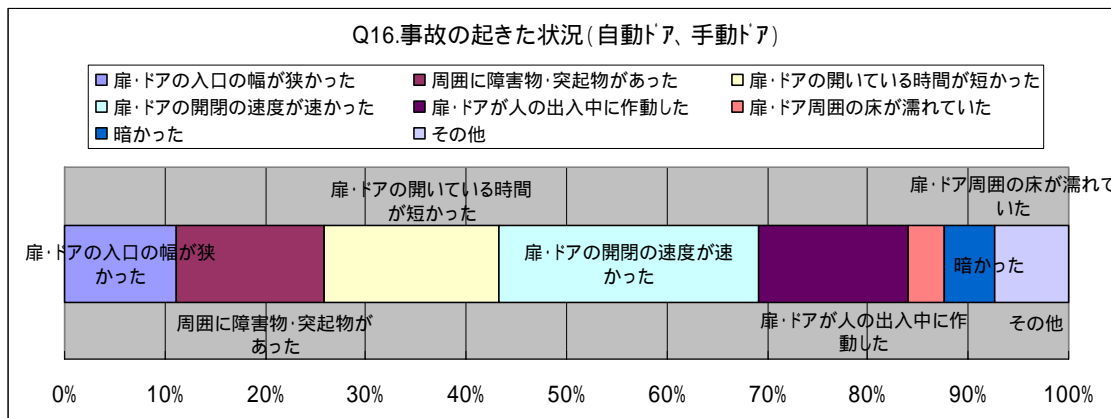


事故に遭った状況を「エレベーター」で起きた事故について集計したグラフ。「扉の開閉」に際しての事故が多い。「段差」、「死角」は少ない。

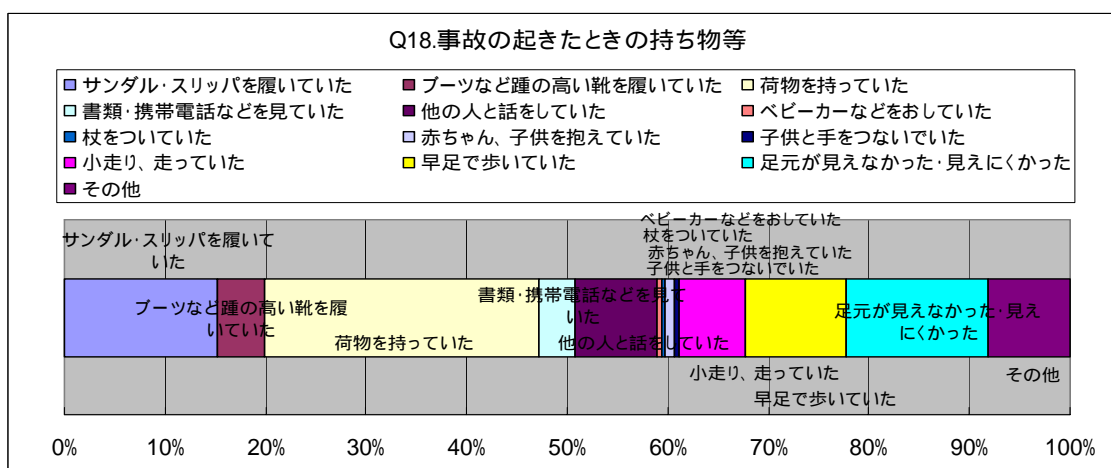


事故に遭った状況を「エスカレーター」で起きた事故について集計したグラフ。サン

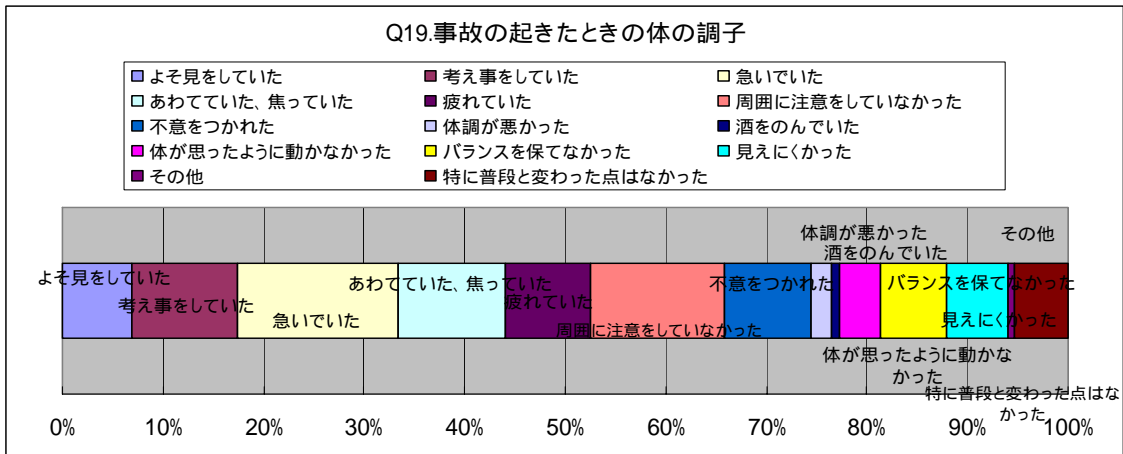
ルが少ない(5件)



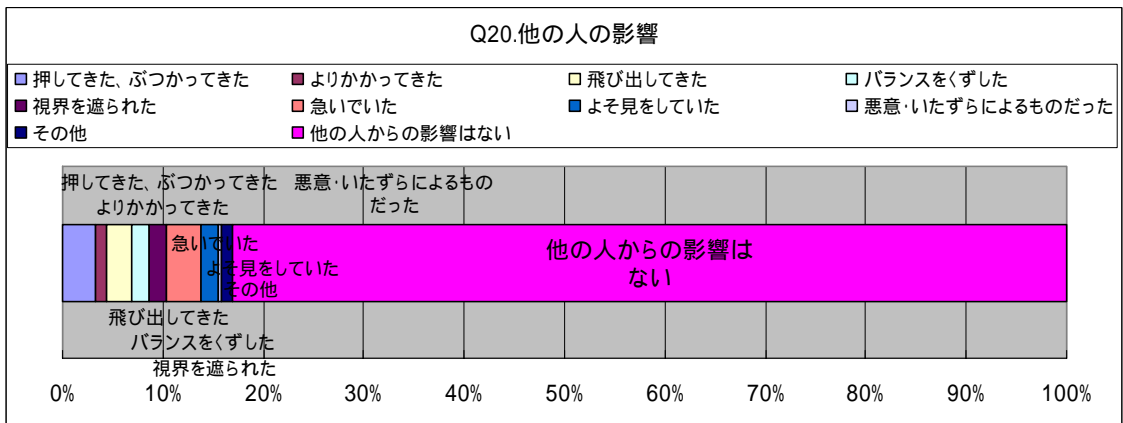
事故に遭った状況を「自動ドア、手動ドア」で起きた事故について集計したグラフ。開閉のタイミングに問題が多く指摘される。



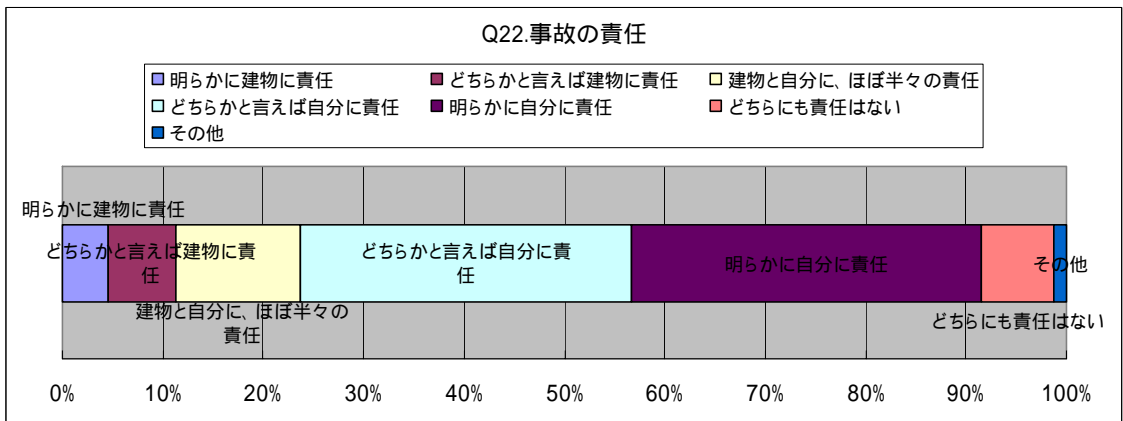
事故に遭ったときの持ち物や行動など本人以外でも認識・判別できる状態について集計したグラフ。第1に荷物、第2に履物、第3に早足が要因。



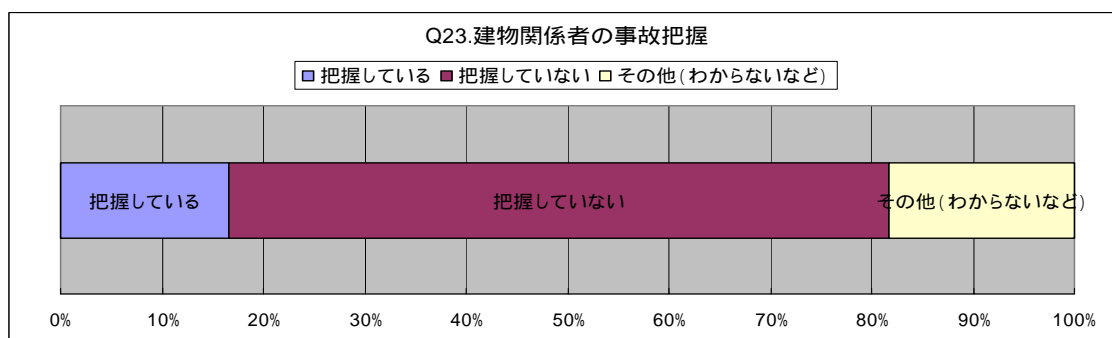
事故に遭ったときの体の調子や気分・気持ちなど本人しか認識・判別しにくい状態について集計したグラフ。「普段と同じ」というのは少数。**何らかの不具合が存在。**



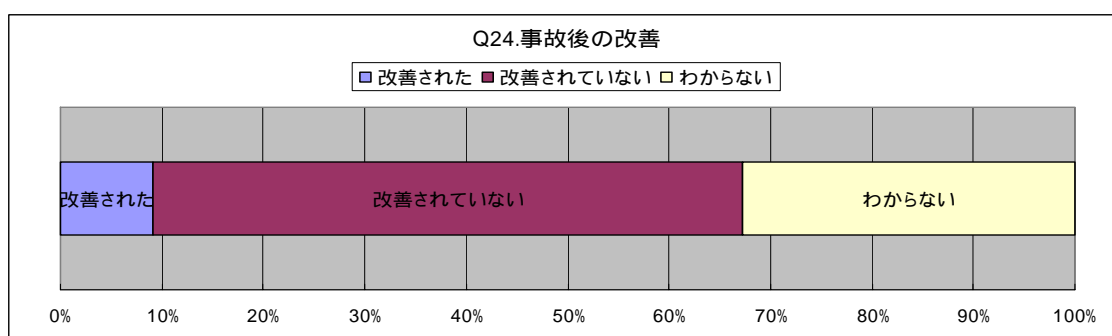
事故に遭った状況について他の人の影響があったか否かを集計したグラフ。**他の人の影響があるものは2割以下。**その中では他の人が急いでいたりよそ見をしていてぶつかってきた、飛び出してきたという状況が多数。



事故の起きた責任について自分にあると思うか建物側にあると思うかを集計したグラフ。「どちらにも責任はない」は第三者によるもの。「自分に責任がある」と判断している者が7割程度。



事故が起きた事実を建物管理者（所有者・管理者）が把握しているか否かを集計したグラフ。「把握している」は2割弱。



事故が起きた後、当該箇所が改善されたか否かを集計したグラフ。「改善された」は1割弱。当然ながらQ23の建物管理者が把握しているものよりも改善された率は低い。なお、日常行かない場所で事故に遭ったり最近事故に遭ったりして再度現地を確認していない場合もあり得るため改善された率はやや低めに出ている可能性がある。

### 1 - 2 - 3 本調査B（同居家族を通じた若年（15歳以下）、高齢（65歳以上）の事故経験者に対する質問調査）結果

調査日程 11月20日～29日

調査の流れ

発信数 約3000件

対象者は予備調査で「詳細な事故の内容を、事故に遭った本人に聞かなくても知っている」と回答した約3000人に、自宅以外の事故であるか否か、予定の質問に答えられる程度まで知っているか否かを確認した上で最終発信。

回収数 若年者の事故事例 152件

高齢者の事故事例 64件

質問内容（詳細別紙）

最も最近の事故1つについて質問（Q20以外）

Q1．事故に遭った家族の特定（若年者又は高齢者）

Q2．若年者の年齢

Q3．高齢者の年齢

Q4．事故にあった家族の性別

Q5．事故の種類

Q6．事故の程度

Q7．事故の時期

Q8．事故の時間帯

Q9．事故場所の日常性

Q10．事故発生時の日常性

Q11．Q10の非日常性の内容

Q13．事故の起きた建物の種類

Q14．事故の起きた建物内の場所

Q15．事故の状況や原因（記述式）

Q16．事故の責任

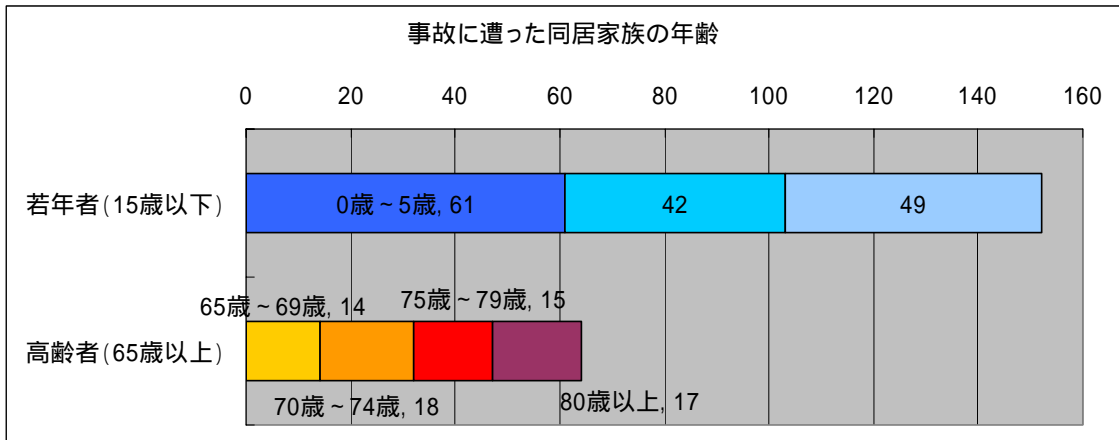
Q17．建物関係者の事故把握

Q18．事故後の改善

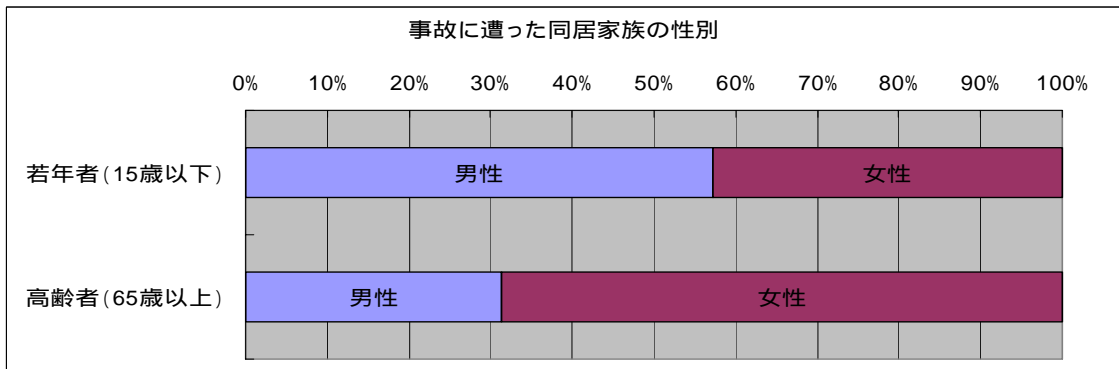
Q19．改善の内容

Q20．建物内の危ないと感じる場所

## 事故に遭った者の属性

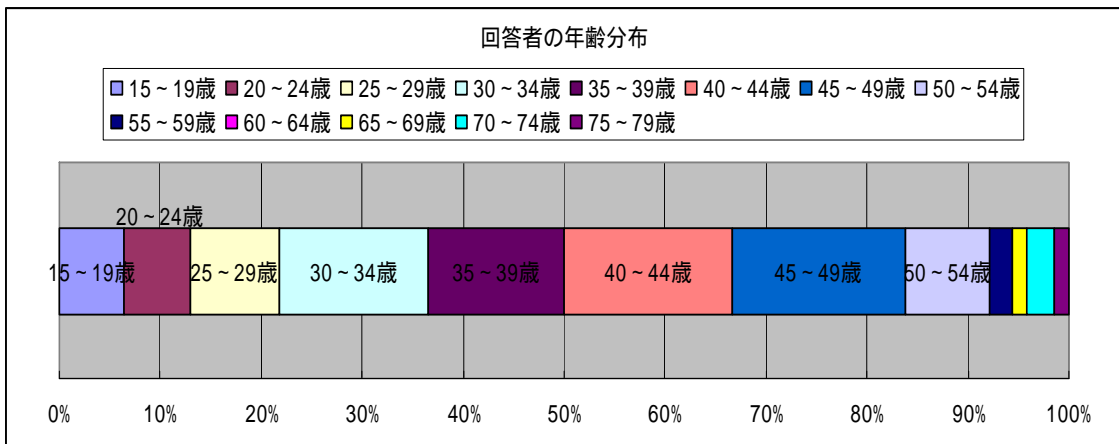


若年者（15歳以下）152件、高齢者（65歳以上）64件の事故に遭った者の回答が集まった。



日本人全体では若年者の男性比率は51%、高齢者の男性比率は42%。ただし、これだけでは高齢女性が事故に遭いやすいとまでは言えないと思われる。

<<参考：回答者の年齢分布>>

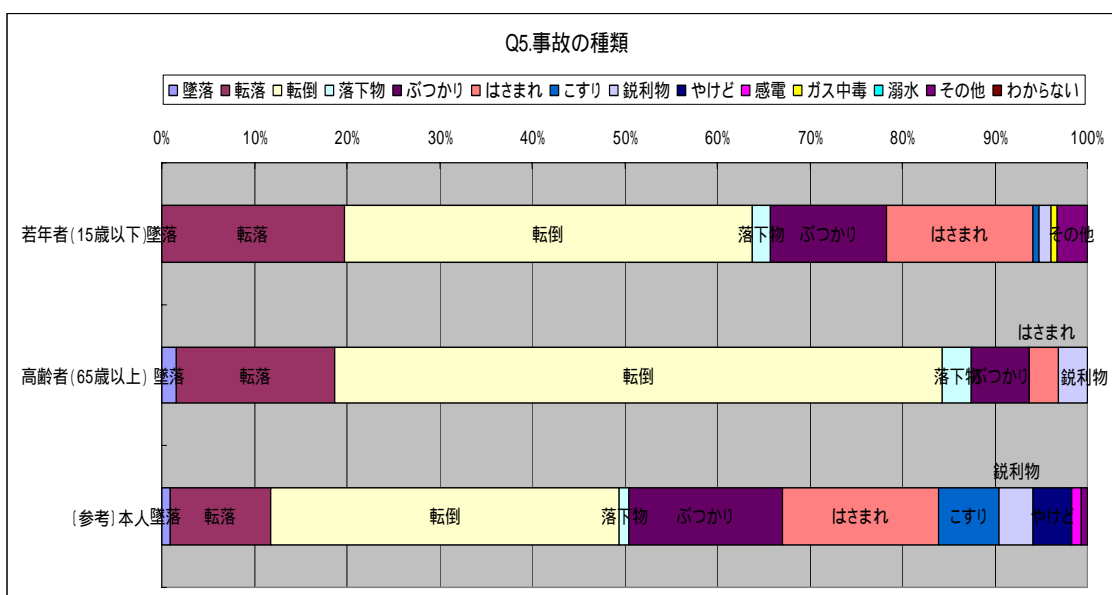


30代、40代が多数。子供の親、老親の子供が回答したケースが多いと思われる。

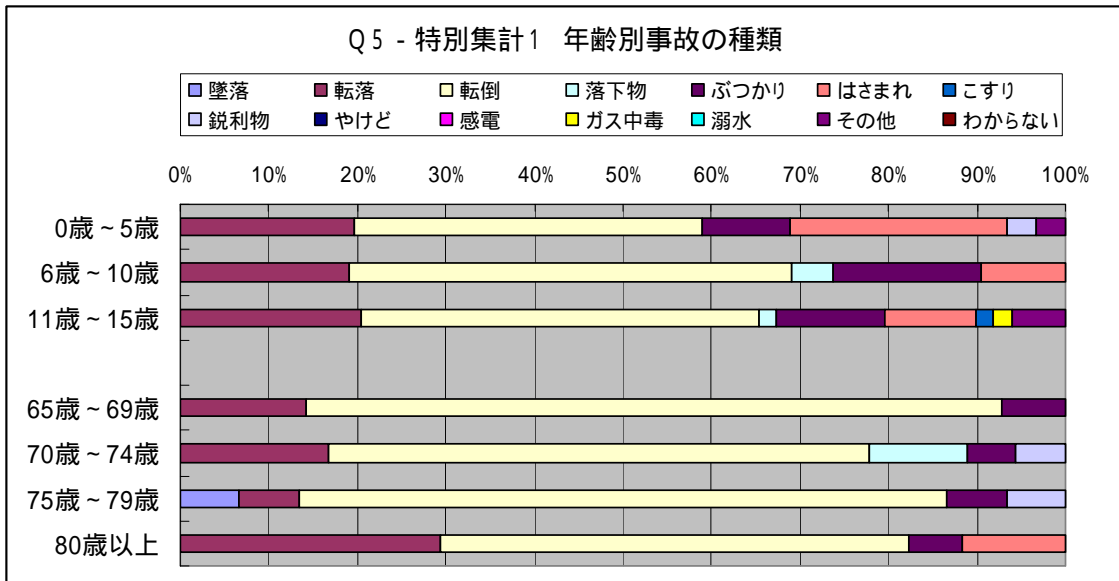
## 本調査 B 結果概要

### 【全体的な留意事項】

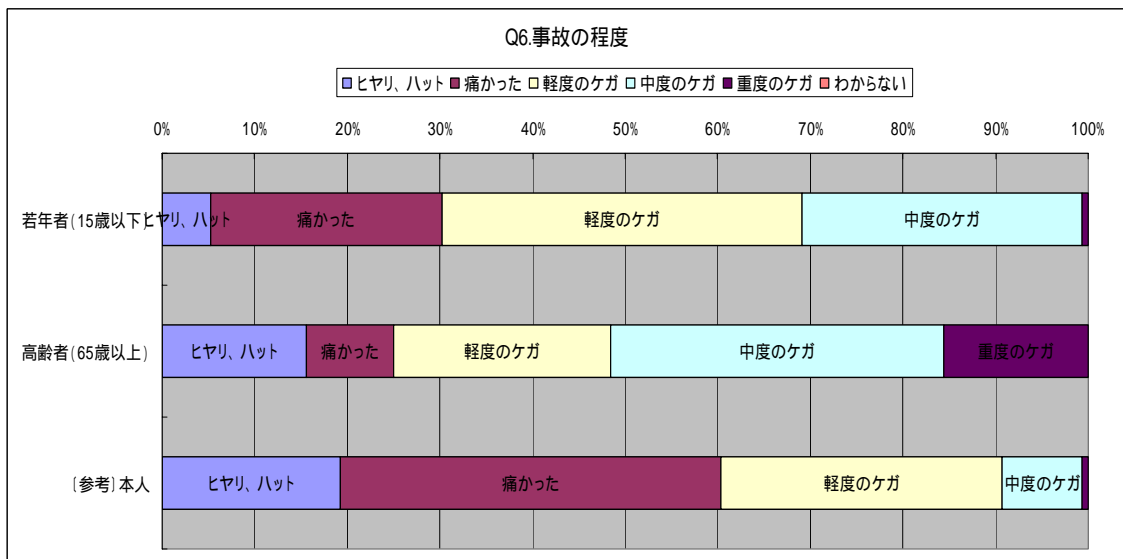
家族を通じて事故の状況を尋ねているため、回答での出現頻度をそのまま実際の事故の発生頻度ととらえる訳にはいかない。



事故の種類を集計したグラフ。家族聞取りによるこの調査（本調査 B）でも「**転倒**」が**最多**。特に**高齢者での比率が高い**。若年者でも「転倒」が最多だが、他に「転落」「ぶつかり」「はさまれ」が多い。

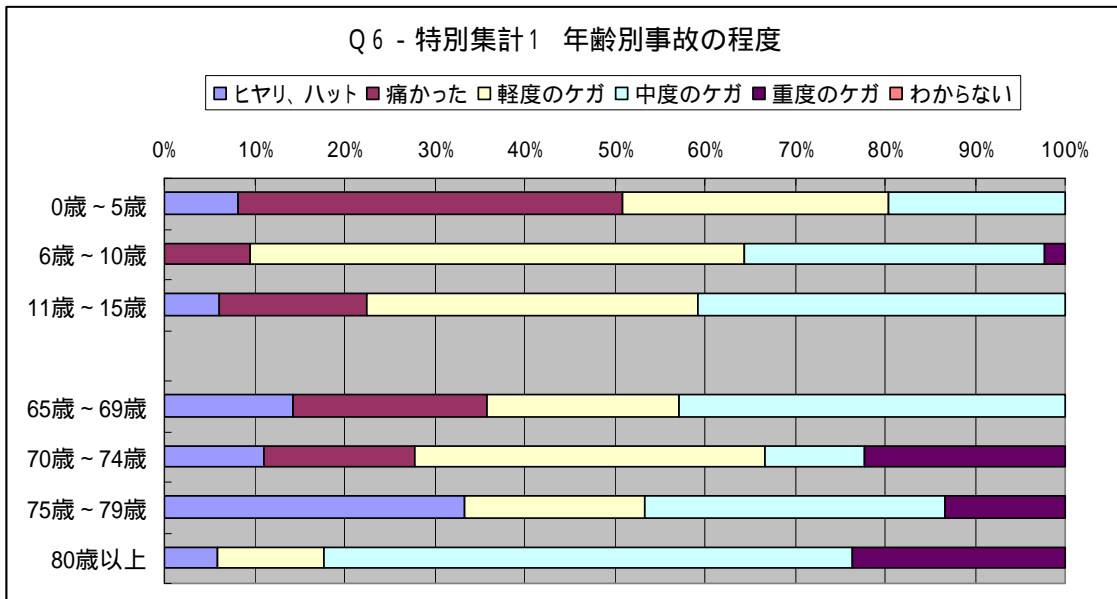


事故の種類を年齢別に集計したグラフ。0歳～5歳の乳幼児では「はさまれ」がやや多い。  
6歳～15歳の少年では「ぶつかり」がやや多い。 高齢者は各年齢層とも「転倒」が多い。



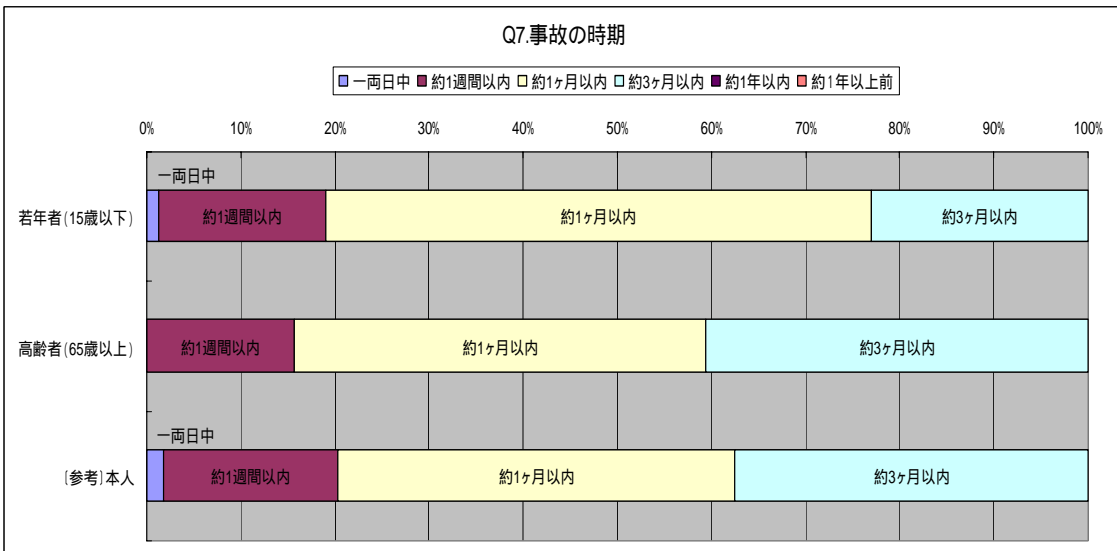
事故の種類を集計したグラフ。「軽度のケガ」以上の比率が高い。「ヒヤリハット」、「痛かった」は軽微な出来事である場合に居合わせなければ家族が把握しにくいと思われる。



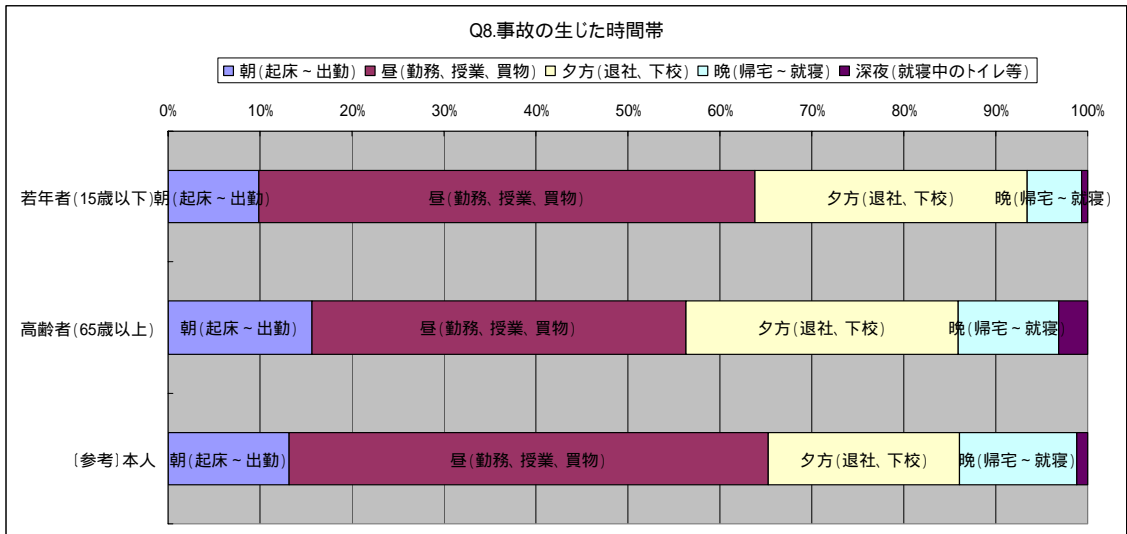


事故の程度を年齢別に集計したグラフ。0歳～5歳で「痛かった」の比率が高いのは親と一緒にいて事故に気づく場合が多いためと思われる。6歳以上では一人で行動することが増えるためケガに至らないと伝わりにくいと思われる。

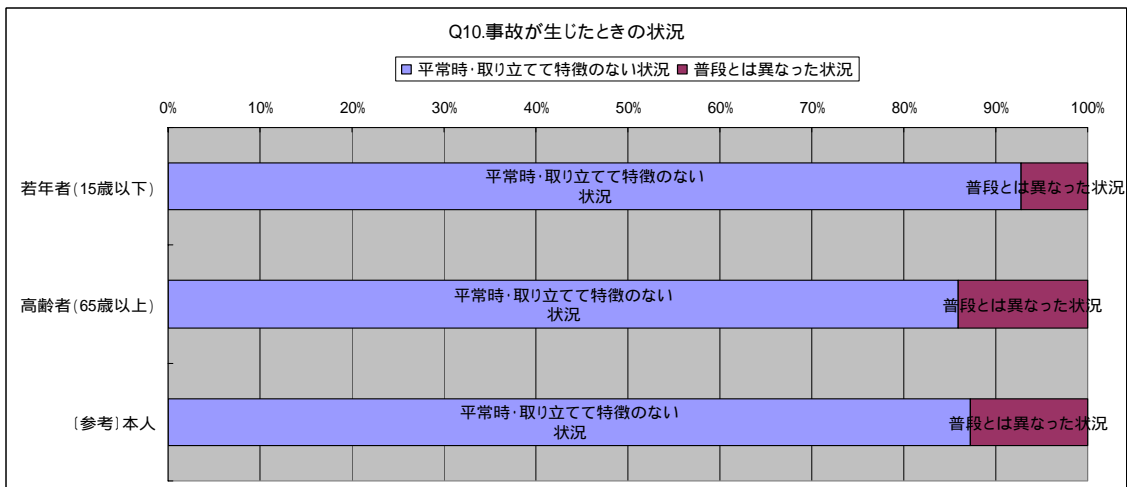
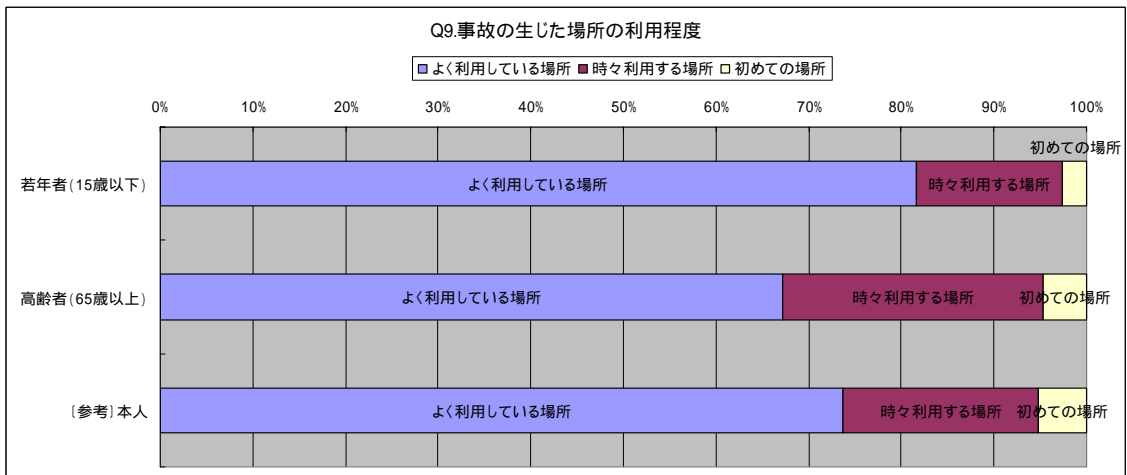
高齢者になると「中度のケガ」「重度のケガ」が増加。本調査Aで本人に尋ねたものでは軽度以上のケガが約半分だったことからみて同居親族が把握しているものは実際にケガに至った事例に傾いていると見られる。



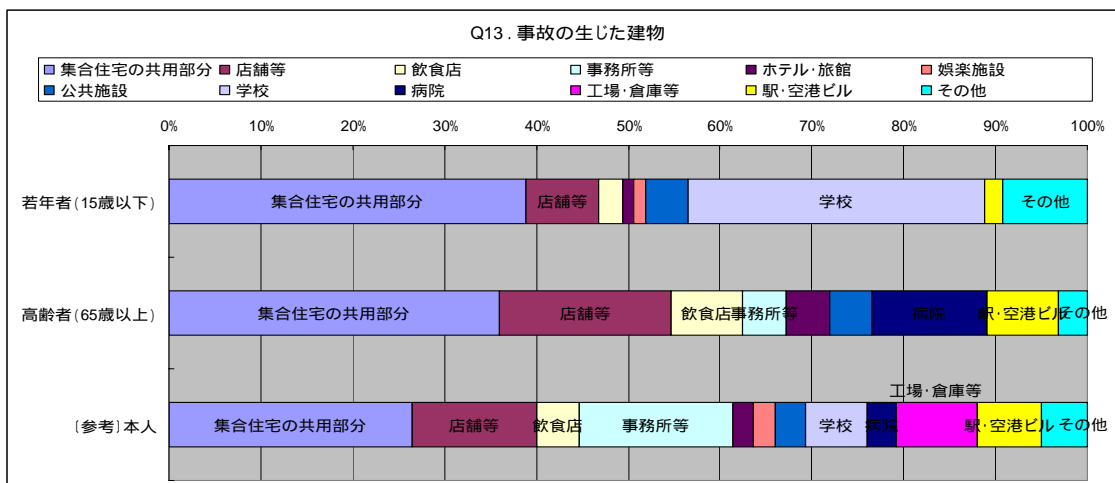
事故に遭った時期を集計したグラフ。若年者に「約1ヶ月以内」未満の事故事例が多いのは事故に遭う機会が多いためと思われる。若年者で本人に尋ねた場合（本調査A）よりも比率が高いのは、対象年齢が低く15歳以下で事故に遭う頻度が高いためと考えられる。



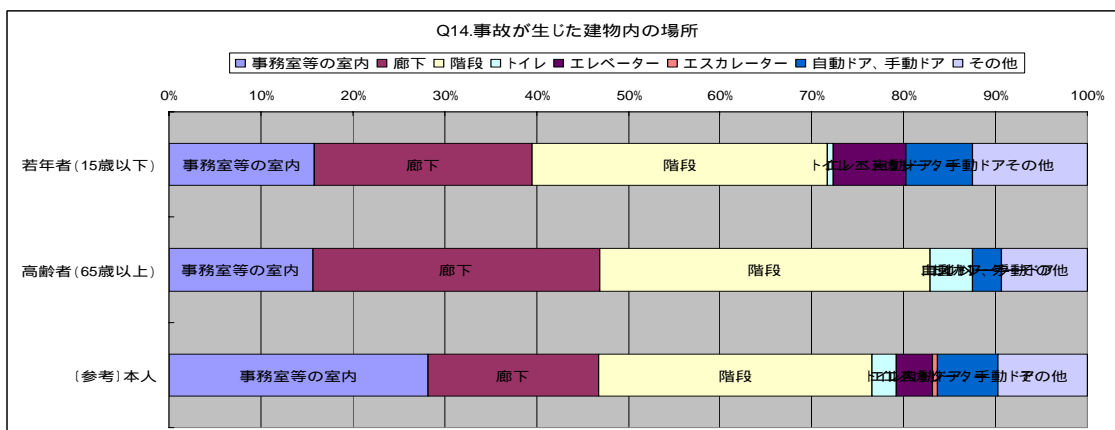
特段の特徴なし。



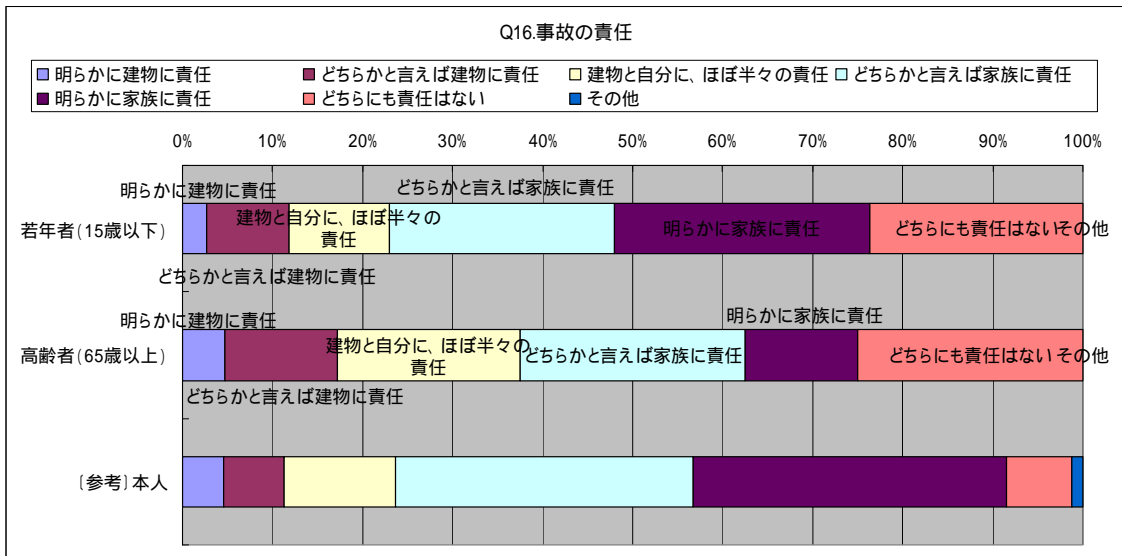
事故にあった場所・状況の日常性について集計したグラフ。滞在時間との関係での判断はできないが、慣れている場所や状況でも事故は起きていると理解できる。



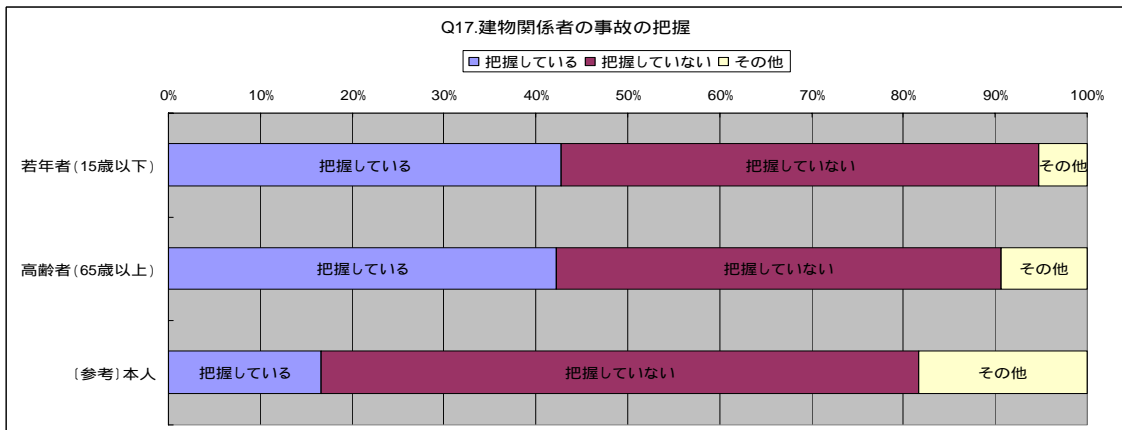
事故に遭った建物の種類を集計したグラフ。若年者に学校が多く、高齢者に病院が多いのは生活行動上の特徴と見られる。いずれも集合住宅の共用部分が多いが、家族を通して尋ねたため、身の回りでの事故が反映されがちであったと思われる。



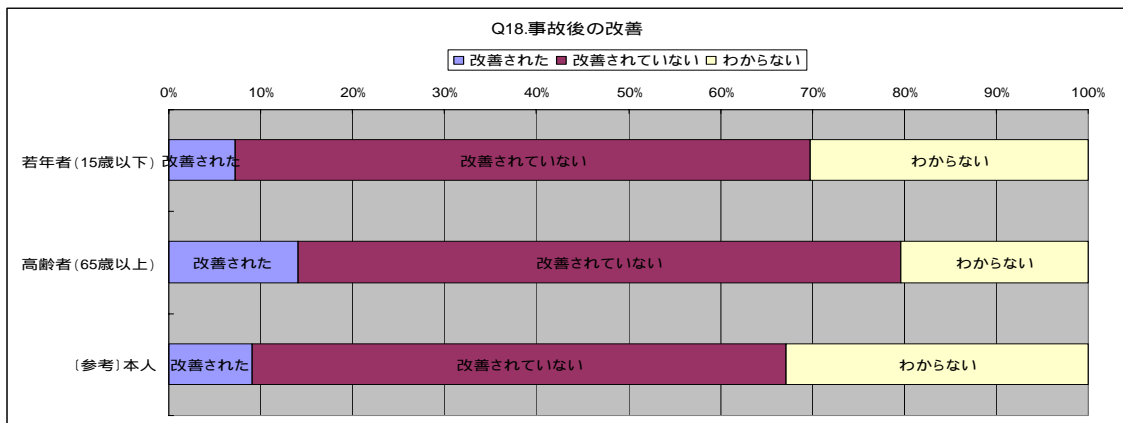
事故に遭った建物内の場所を集計したグラフ。室内、廊下、階段が多いのは本人の場合（本調査 A）と同様。若年者でエレベーターと自動ドア、手動ドアが多いのは動作・行動が反映している可能性がある。



事故の起きた責任についての家族にあると思うか建物側にあると思うかを集計したグラフ。本人の場合（本調査 A）よりは建物側の責任と感じる者が多いがそれでも人間側に責任があるとする見解が多数。



事故が起きた事実を建物関係者（所有者・管理者）が把握しているか否かを集計したグラフ。建物関係者が把握しているとする比率が4割以上と本人の場合（本調査 A）より高い。「軽度のケガ」以上の事例が多いためと思われる。



事故が起きた後、当該箇所が改善されたか否かを集計したグラフ。多少の差異はあるが改善されていない場合が多数。

## 次回以降の同様調査に向けて

今回の調査では予備調査の質問で日常事故の程度ごとに回答者に尋ねた。これは、事故の程度別の出現頻度が予想できなかったこと、すなわち直近の事故を尋ねた場合ヒヤリ・ハットばかりとなりケガに結びつく事故のサンプルが得られない懸念があったこと、予備調査ではローデータが納品されないという当初の話から質問数の制約（5問以内）の中、クロス的な傾向を抑えようとしたこと、によるものである。

しかしながら、今回調査の結果、については、重度・中度・軽度のケガ等もほどほど存在すると確認できたこと（予備調査でのケガの有無の質問で有は76%、本調査での直近の経験で軽度のケガ30.4%、中度のケガ8.6%、重度のケガ0.7%）、そもそも重度の事故の状況については詳細分析を行うことがなかったこと、については、ローデータも購入できることが判別したこと、から次回以降はもっと簡潔な質問方法が可能である。

例えば

Q1．日常事故の経験の有無（無しの場合は質問終了）

Q2．直近の事故1つについて、その程度

Q3．　　　　　　"　　　　　　　　　種類

Q4．　　　　　　"　　　　　　　　　場所

とする方法がある。

また、今回の予備調査では質問が簡単な分、マジメに回答していない者あるいは想定外の勘違いをした者が見受けられた。例えば「一両日中」に「重度のケガ」をしたと回答した者48名のうち、同じく「一両日中」に「中度のケガ」も「軽度のケガ」も「痛かった」も「ヒヤリ・ハット」もすべて遭遇したと回答した者が23名存在した。事故の内容を詳細に尋ねればそのような者は排除できると思われる。

経験率が高いので予備調査なしで直接本調査をすることもあり得る。その場合、半年前の事故の経験が出てくるかもしれない（逆に詳しく答えきれないので落ちるかもしれない）ので頻度・分布を重視するか事故の状況を重視するかの違いがある。

また、日常事故に「やけど」「感電」「ガス中毒」「溺水」を含めるか、「ヒヤリ・ハット」をそれなりに（漏れなくは困難）集めるか、の課題が浮かび上がった。

「やけど」等は例示として上げなければ、「その他」欄を設けても回答者は意識しないと思われる。逆に含めた場合は、そこまで分析対象とするかという問題がある。なお「やけど」は予備調査での「軽度のケガ」では最多の種類であったが、本調査Aでの直近の事故では「軽度のケガ」の頻度が低いため全体の4.2%と12種類中（その他を除く）第6位であった。

「ヒヤリ・ハット」は質問の仕方では回答者の意識に上がるか否かが大きく左右されると思われる。最初に「日常事故とは」と厳格に定義（例えば、「墜落」「転落」「転倒」...）すると起きた出来事へ意識が誘導される。「転倒した、または転倒しそうになった」、「滑った／つまづいた／転んだ」など表現が重要となる。また、質問に入る前に細かく表記するか、冒頭は例示にとどめ選択肢で細かく尋ねるかのパターンがあり得る。質問の順番も「種類」を尋ねる前に「程度」を尋ねると「ヒヤリ・ハット」が浮上しやすいと思われる。

## 2. 建物日常安全モニター調査について（参考事例）

### 概要

一般市民が会社・外出時に建物内での生活行動の中で遭った日常事故についてその概要をモニター方式で尋ねる。住宅内での日常事故は対象とはしない。また、ケガには至らなかったけれども危険を感じた・びっくりしたという体験も含む。

### 目的・趣旨

- ・日常事故、特に軽微なものは把握方法が難しく、なるべく常時観察に近いモニター方により実態に近いデータを収集すること。
- ・日常事故発生現場についてなるべく画像データを収集すること。

収集情報：事故の状況報告（別添モニター調査事項参照）

調査期間：1ヶ月

モニター対象者：100人（可能な限り各年代を含むが60歳以上及び30歳以下を重点）

### 注意を促す事項

事故・危険の状況、原因（筆記式回答）は約100字程度で記入依頼。

報告は事故ごとに1事例として整理する（1回の報告で複数事例を1件として報告しない）

写真についてはモニター対象者の手持ちの携帯電話などで撮影・添付を依頼する。安全・トラブル回避を優先し、ケガをした場合に無理をして撮影するようなことなどは求めない。

なお、収集した情報については建物内での日常事故減少の研究の目的以外には使用しない。

次ページに、調査項目を記載する。

建物内における日常事故のモニター調査事項（モニター対象者からの報告事項）

---

あなた自身が会社・外出時に建物内での生活行動の中で遭われた、日常事故の情報提供についてご協力をお願いします。

本調査では、日常事故として、ケガには至らなかったけれども危険を感じた・びっくりしたという体験も含まれます。

地震・火災等の非日常的なものによる事故は除きます。

住宅内での日常事故は除きますが、マンションの廊下・階段、エレベーターなど共用部分は含まれます。

Q1．事故の種類（危険を感じた・びっくりしたという体験も含まれます。）はどのようなものですか。

墜落事故：バルコニー・窓・吹抜などから落下する事故

転落事故：階段から転げ落ちる事故

転倒事故：つまずいたり、すべったりして転ぶ事故

落下物による事故：タイルやバルコニーの置物が落ちてきてぶつかる事故

ぶつかり：建物のどこかに体をぶつける事故

はさまれ：ドア・引き戸などに指などをはさまれる事故

こすり：建物のざらざらした表面でこすって傷つけられる事故

鋭利物による事故：窓ガラスなどで体を傷つけられる事故

やけど：ボイラーやストーブなどでやけどする事故

感電：コンセントなどで感電する事故

ガス中毒事故：ガス器具などで中毒する事故

溺水事故：浴槽などで溺れる事故

その他の事故：建物に関係する上記以外の事故（具体的内容）

Q2．事故の程度はどのくらいですか。

ヒヤリ、ハットした

痛かった出来事に遭った（特に処置しなかった）

軽いケガをした（救急箱で手当てした等）

中程度のケガをした（通院で治療した等）

重いケガをした（救急車で運ばれた、入院した等）

Q3．事故の発生時間はいつごろですか。

月 日 時頃



